俳諧水滸傳 完

へ 5
713

文
164

俚諺水滸傳

完

利
713

明治三十六年十一月
呼人[illegible]氏寄贈

門 莉
號 713
卷

凡例

古文書類聚抄は速記法の如くなるものと二意あり一は
一部の建立なる所以を言ふ者と一は
の書面所の如くなるものを以て他二つのものの書を一云人の異説
集めを以て此許の名をつけて今古文書を中興
世紀年を以て今所の經過を記す事は
あり かの古を理解の事行きを以て他による所の名称も
つくる

古書を著すに古人の事蹟は事実を基本の事跡をもつぱら又は
旧友諸士の伝説をもつて事実を会せて所て文章の体となる
で宗盟ぶ事を稱ふ事を稱ぶ類を集めもつぱら
自雅青半間家ぶ語事と人の語を少て高尚を

恒年奇沒皆之御と和さず
古人の句々之章毛々混ぜん或て集中より拾ひ或て単
跡を見て拾ひ
古人之筆跡之筆月日を或い清書ス敬て或て碑すること
めて之印きた拾ふ清書のでき人毛書ス感ふ時と毛稀
りの時と筆月お遠のあり方にて記れ
泉之筆跡之七の筆月御書下到の筆月一枚ス纂集て
事が録ふる所ス御階より仕廻ふ
一ふの大ス之筆の筆数を知ふ多ふ古人句ス御作ス
いを集せ也ふを切ふて正時ス之筆を拾ひ京
色ス所く討編ス拾ふ邪筆跡の寫ス多ふ皆見の御士地
ス毛多て毛清書を始ふ事ふれ

此書り師橋中の芝居ス御京都ス羣拾ふ
小暴ス電隠せふ事ふて毛書ス左拾ふれを
ふらく、時記の夫ふ人拾の刻日を異ふの那毛

注左ス書ふれば?

佛諧略伝目録

巻之一

連佛品定出人傑　一葉表
守武感聖廟神夢　三葉裏

巻之二

聖代文啓佛諧興　八葉表
立甫重頼遊洛西　九葉表
西因解壁画之意　十一葉裏
宗鑑與拂子西因　十四葉表
雪禁炊奥国宗因　十七葉裏
雪川海霞開雲帆　十九葉裏

巻之三

聖一子句名琵琶　九三葉表
真空禮佛諸真德　九五葉裏
宗因新佛諸住去　九八葉〃
西鶴拋筆上万句　九一葉表

巻之四

梅翁梁塵林風花　九四葉表
別杯謠泝激流　九六葉〃
梅翁佛威震都下　九七葉〃
田平月夜訪耒山　九九葉〃

巻之五

耒山托病拒塵林　四十二葉〃
言水狂木殺風吟　四十四葉裏

捨女淚句彗紫藤　四十七葉裏
香蘭秋風定良人　四十九葉〃

巻之六

宗房踏蛻退伊賀　五十三葉表
於風奪杖岡桃青　五十五葉裏
拾穗軒季吟談佛　五十七葉表
岚蘭去國継旧交　五十九葉裏
桃青深川九歌仙　六十一葉〃

巻之七

東順草庵引故人　六十七葉表
素堂信德讀次韻　七十一葉〃
桃青古風三百負　七十四葉裏

其角嵐雪爭桃櫻　七十六葉裏

巻之八

桃青水青碎大疑　七十九葉表
子規啼五尺菖蒲　八十二葉〃
才丸楊水諫晋子　八十四葉裏

巻之九

芭蕉潛水免火災　八十九葉表
梅流掬月惜春色　九十葉裏
嵐雪夢母啼籠鳥　九十二葉〃
芭蕉翁歸曙記行　九十六葉表
金神傾銀救旅人　九十八葉裏

巻之十

桃青隱里語金神　百二葉表
蕉翁咏既傍樓花　百四葉裏
墨風蘭香蝶蝶翅　百七葉表
足爭披佛泣白髮　百九葉〃
翁入美濃宿木曾　百十三葉〃
冬日尾張五歌仙　百十七葉〃

以上

東京芝区大久保
餘一町百拾貳番地
塚田藏書

俳諧水滸傳巻之壱

吉備　遍月葉　空阿著

○連俳　乃定世人傑

？

寧ろ中ごろ久堅れ玉ふ事ハ安倍名流中の神童をもあとして
荒金の書ハ六歌仙の人麻呂八重垣ふ三十字の略り一文字の負ふ
ものゝ人麻呂ハ歌代と略りてハ柳本の人丸山辺の赤人の野山
さきだの文字の書枝数の筆者の上手ものゝ古今集内
ものゝ中国ゝ三代八代の代ゝの勅撰ものゝ歌ゝ徒
ゝて最ゝ冊ゝ冊ゝ巻ゝ巻ゝ極ゝの初歌と
ゝふゝ五七の文字を合ゝ合せてゝ一首ゝとなゝるゝ中ゝ
ゝゝ五七の五七の三文字を上の句と名ゝて十文字ゝ七文字
次の七七を合せて十文字あまり四文字ゝ下の句といゝ

り作るべし三の句は下に据て第二の句を連接の助辭とし下の句を四て又の句をよ為にあるを意味して事既の接続とし之をもて古事既に成りたるものとなすべきなりたる人を十二代景行の御宇日本武尊東征の時酒折の宮に到りて新嘗祭を行はせ給て「山なみ過て」と宣へり連歌の発生を此歌に於て「かゝれば九月九日六十日を」と申すより初まりて義経記に大体の意味なれども「他保川の水を堰て柿田を」とよめるは「かゝわさいなを刈るなるべし」とよみ又「かゝる人の見られぬ」と云へる所の意味なれども又連歌と異なる所の松の花と書れなど或は天慶の帝宮を今おわるゝ世作られる「小枕ふりて」と云へる所なるべし「湯殿の内侍に参らせられて「夢なるべしと人やまつらん」と義せりあり又拾遺集中

将来に伝へる時は其弁除の陸方能書の許へ入室に於て和を求て
の歌を以て「ふるかしの」と云へる歌を拾の歌」と云へる歌を
初めるに「陸奥にて拾の歌」と云へる道に本を求しるの
外いは和歌詠歌の道を下のいは社と云へる清あが雷
如き事にて「静の雷」と云へる是等の歌を模倣とせいつら連
歌の事を求へ拾の歌を多帝連歌に於て紹鷗ふ
じが為なる故に大学式を著へ第一の歌集帝の為の五条の
人は善之国俗良至伝立水部の新式を著へる新式迎
かを拾の国帝言述之実を摂政真伝宗祇法と云て
連歌一の歌の拾の帝の式を著へ新式伝授
牡丹の百句と云て新式伝授
と解れば宗祇相伝の字長なども物を以て言を以て後よりものの

の勅許を蒙り連歌の称号を賜はり北野聖廟の宗匠連歌宗
匠郁錦織の裏に連歌と称れ千代れまでもとして
の家の規模ともなる家々に伝へ今に至る五代は柏木宗匠
宗匠とのや都の風や伊勢の神風に上冨田長者中川
平安の武といへるもあり其門下に風流の人多く
藪の俳諧を専らとし連歌は其家の門に俳諧の
に入る俳諧連歌の俳風に紀子を宗匠の身とせまへ
北野の古今集の俳諧の俳諧の連歌として宗匠を
宗匠家の古を存し俳諧しあるは一度年頭の宗
匠なりしを足めて
宗匠の見俳諧の都良月
とりなされ宗匠となりあへり

俳諧は宗匠着て
とはいかにやあるいはらの武名ある神の俳諧の連歌を
再びと古事の様をなしてもて俳諧の連歌を
離れて古事の様を学ぶものなれどもこれもて鉄
心をは俳諧の様あるいは連歌の俳諧をせ
さあはれ古今の絶えて俳諧の一派をなされ
是れ鉄鈍の情あらんやと歸ふ
するものは其事のききたるは其場其の雑
之俳諧の代すなはち
俳諧の句を作りていふ事に千六枚の短冊
よらの句をうつして日本の中の俳諧の
祝をなして三月花見の葉寛政六年寅の

然ば何事ぞ猶紫に来鳴て霞む梅が香は異なる事を嘆ならぬや
と云ふ人あり世を捨て立ぬれば露に詠む道を何か世にある和
歌の道に耽る詠ずる事かくて漸くやすく根継などの所はさるあわれ
は半の更に到り詠ぜし山の松の木蔭を立出て枝を目に童
ぬる梢に見れば小舟に渡りなる様なる眺めの思ひに離れて根ざし駅
路の筑紫山雪の三上の山と風都の事も詠ふに見えて浪来し浦波
辺の河添の流れとて

青柳の眉かく岸の額かな

とまり船の洩りをたて東風吹風の汐路はより梅が香ふく風あらの水
に着ば宰府の梅が香に伝ふて見れど見所ふ尽き年月の
思ひなる

○亀戸宰府天満宮

亀戸村なる宰府の風景を見るに都の北野の梅の花観音寺の御社
に藤棚川打渡せる一千の華表二の鳥居の向ふなるかたに
の池は心字の池の形にて三橋の内太鼓橋彩虹を渡して鷺
巣は汀に棲むで松柏は御社を護る様なるなかに高く聳たる
拝殿あり左に鼓楼あり右に鐘楼の雲の如く朱塗に飾られ紅梅殿先
梅あり中殿の右は中庭に咲て其の紅白の花の紀に
ほひを含みて猶く庭の下に梅窓にてかの飛梅なれば
葉ふと落ちぬるぞ遥かに見ゆる其の流れを越て人の風情の
其梅の花のかくと一首の和歌を添へて奉りまつる
飛梅やかろがろしくも神の春
と詠ぜし守武の従ひ来る中にも猶白光を放ちたる松の影に映
ぜる梅の臥竜梅は臥竜の如く森々と枝を広げて人の手にふれぬ神

代の事などもおぼえて覚わてもの知あるゝ人鳥帽子のかし
らぎ二重のうちに袴をはき上の白ゝはきを俳諧師なりとて
をまで小賞して蕉翁四季の句とも武士の句とも十七文字
の内に四季の句とおぼゆ俳諧師なる名目を詐
好に見つぎるに不興なるまゝに社壇の屋きりとして歌舞の
志ゝのいと言ぎるぎ百人の紙の色合せ作者と尚ゝ出でち
武ゝ頭上に立て思ひ微妙のかゝりをるとうのゝて法師一ツ羽
なれぐぐがいくゝなれば武士なりとやゝ俳諧
れば光翁蓮雪とて先を自義武士ぶ風雅の作を保ゆるゝ
四の俳諧を善とせば流儀を持業の学問初ゝ行り俳諧をを
地梅色の移ゝ縁れ来ゝ武の作ゝ歌で蕉門ゝ系ゝ和てい
ろいろ時ゝの事ゝ風俗の興廃ある事を先ゝ自ゝ見ゝ見る

立て是を正能一市を乃俳諧を蕉翁一是俳諧の未来記
ありと申武ゝ作せる人傍ゝ蕉翁ゝ門生ゝ為て未来
の俳諧を達て曰ゝ唱ゝ蕉翁俳諧の作ゝ法ゝ紙の如ゝ書一ツ
人の心を表ゝ作ゝ蕉翁ゝ言ゝ和ゝ歌ゝ俳ゝ諧ゝ自ゝ作ゝ或ゝ
作ゝ言ゝ心ゝ四ゝ季ゝ句ゝ武ゝ士ゝ句ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ
言ゝ俳ゝ諧ゝ作ゝ大ゝ和ゝ言ゝ葉ゝ大ゝ和ゝ言ゝ葉ゝ
和ゝ歌ゝ作ゝ人ゝ自ゝ作ゝ民ゝ俗ゝ歌ゝ和ゝ歌ゝ作ゝ人ゝ
武ゝ士ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ武ゝ士ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ
歌ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ武ゝ士ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ
俳ゝ諧ゝ師ゝ武ゝ士ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ
五七五七七の文の字ゝ民ゝ民の言葉ゝ和ゝ歌ゝ
和ゝ歌ゝ作ゝ人ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ武ゝ士ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ
言ゝ葉ゝ和ゝ歌ゝ作ゝ人ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ武ゝ士ゝ俳ゝ諧ゝ師ゝ

不老不死の術を修して久しきを以て仙人となり、遂に天に昇りて
仙人となるべきものなりと雖ども、其の術未だ成らざるに、
人間の世界に戻りて、深草の少将の
恋を知りそめ、後を思ふて
和歌を詠じ、書を知り、
こゝに見る如く、触れるものゝ
情を用ひて、縁を結ぶ
時は、後世の人々を驚かすといふべし
況んや侍従あるべきふるまひ、
況んや七夕星、
まゝ、
つゝ、
有りの温泉あるを聞かんと、
温泉を見出でゝ
所謂の物を持て、
都を以て打捨てゝ、
遂に七夕の
星の東撰式の三部作
とゝ、
を原流の二部作
まゝ
の秘訣を
を
の
温泉を
温泉の
温泉を完成

景を賞して人を軽んじる風あらんと、
所謂の物を持て、
海の物を持て、
都を以て打捨てゝ、
遂に七夕の
東撰式の三部作
とゝ、
を原流の二部作
まゝ
の秘訣を
を
の
温泉を
温泉の
温泉を完成

ら和尚の面目を惜りて迎ん狂濤の卵を踏り雲をうらハ一元八
き傍の弟子を指て八い書の日走杜ぶ腸を抑り強門富徳の音を
おて狂白上の一路をつるひ高吳乃綿に雲を吐云妙の白てて
いをおどろかす人生時こそ此海をとく是をわて也上一路の風
る帰之是をうをこ是て一生涯の白一時恨門の義を永く捨
接の賜と為人ぞ見ることかを神て沙弥の白鄰を所に梅也を同て
打掃ぶ再び数門散乱て故こそ星是ぞ狂ふうち蕭蕭を
人どうて跡定る絶定ると見てぶ観音を晩鐘再之を聞きて
明に六の面の新の頭面の方を舞き相の者の新を東大
あ出てれ出れば調の拙まを見てきる雪をうべて陸を誕
の面を武ぶ夢ハさめをとをやまれハ出る武を文殊を変も
よまれて時々之を示正たる重録の日

寛政拙さ之人を見れば好情式
物を之の手へ書き河の杯
あどなて答ち狂歌の俳諧を絶式雅を下を立ちめて
ぶ三年八月に百の杜鵑七日亡年七年七月を為て伊勢の玉
る神ぶ忘れまを生て

○聖代文啓能諧興

正保六水七年丁亥仲春の頃即位ましまして世位九年
ゝ永禄元年戊申年正親町帝ゝ改元あり三十年ゝ
丁亥ゝ後陽成帝立給ひて慶長十七年壬子の春の
後帝と申せし聖徳文華の風ましませば世間孫曾半世喝
て世美八変ゝ豊風ゝ化ゝ行ゝ事ゝ行れば聖徳ゝ
及ぶ治既ゝ後法ゝ美乃法能備ゝ行ゝ事ゝ
此頃慶長ゝ初ゝ頃ゝ
子の年の春ゝ

其頭まづかれは五七五の句をいへば其人七七の言葉をなすてぞ
連歌となされば古人くさりの連一二をつゞけ誹に似ていへ
ちるをみて帰るさ忘れけりあらしふく　定家卿
いとゞしく花の錦よ結ばぬ　為家卿
山風は桜をさそふ庭の雪　家隆卿
誰となく錦あらはしぞ春の色　光廣卿
是をまなびて試つゝ
これ藻は角が苔の似ぬとかり　義家野遊
軒の月ひとつの宿やなりけり川　紀前節
其山や花に蔭を心がまへて　富士重忠
光づけて陰より見聞よ山桜　七十三の山崎宗鑑 師　宗
小田のや　あすかの里に刈初せ　大　宅

かすみたちて雪もまだきえぬ　三河の宗鑑
まちえたる花の跡よりみぬ春　細川玄旨
舟の月やまつ先ぞかへ　小堀遠州
其外山崎宗鑑一休和尚守武半井卜養御所の竜安の
一休禅師飛鳥井雅章伊勢の守武冷泉為景松永貞徳の養
細川幽斎松永貞徳沢庵和尚堀川殿藤原惺窩
など皆一芸に名ある人の俳諧に遊ばぬ者なかりし其の中や惣じて
貞代の時代は歌の時代をやわらげて

○立圃　重頼　梅翁　西翁

この時俳諧は長頭丸の風とて世に行はれていかいの士俳仙よ是
並をこぶ此派ひそかれば頼名目く言くいかなる限く歳りて
下駄の風まで化せられたる家の趣や小塩の山の流を察

に長崎の里といへる都にちかき頃移住すて往昔らやすと云へる人
り宋を去りて隠栖高なるを慕ふなるかの東のおの文の翁
誹の翁と号して志を養おいせしとぞされば傍京の心に仙を
まつの心ありて何事をきくか浪花の浦の風をとり侍すます
世に其松様を云ひ一ツ梅林植を継て俳道の大意しかのみならし
のらぬ古翁の心を慕ひて旧翁乃山を鐘を継ぎてその風せ
まで京色なりけるに此宗匠を深くて其を家他にする
隠士ありての心を詳しくせしと思ひ得て不の法西に至るや西
山宗因とていふおのの千のらふより皆く群書を自らさらし
好む事を好みおのづから其家に長じて西鶴は次第の
家匠となりて世の言葉かりしが俳諧の翁一見せ連歌
の捨びを重ねて俳席をまけるの心に其の俳諧を業とする

一派の風を起して頃は梅翁の下に文を耕し宗因の新た
音を鐘て此時まで上るりて古風貞室の俳諧を変じ直にや
とぞおもひける頃より俳諧をもつて山を越を引給て其色
古風のかたちを破りて新を構ふるともいへどもまた其雅
意を新に訓じて言ふらく京の江戸にひろく西鶴を書き
摂津の人其意を一変して国を梅翁とし西国耕をさる夫のさき郎
の旅に俳諧の筆をまで来て其の眺望に備りて定めたれば
そは其の志をまた思ひ出きせよとて 是
とよびて心をやりあそびて宋を来を其人と伝ふ翁を敬の二人
の居士ありて一人が談て曰
世に川心や 鳩に 桐の梯
西国耳を噂さへまた一人

十

也よ酔て走てゆく山路より
と詠ひ捨て二人をさそひて大なる池のほとりに出ぬ弼国の脇なる
を見て弼国曰隠士の水徒をもめせよ弼国曰水を大原
小塩よりいで来る山路にて二度その笠の文字を
地にかくをみるに仙人なるべしと思ひそれば三度目に先
もの笠を脱て渇を癒せんと思ひ笠一張を重ねあやとり弼
国曰二度の笠を嘗んとおもひ笠を見るに笠の内に二人位
を絶てつゆ入らず富井の椅を見るに笠の長柄を折
るをく机上に多の書を掛て一人の隠士数半日ものを見
見ゆるに舞鶴飛鳥来るようて貧弼に向て曰言
士来るをみて何ゆえ弼国曰地をもて為し
て為るゆえ地ゆ山下ゆ出ずを意ずを何の咲

たとふるまうあらんあの日見ゆる所を何の書ぞや弼国曰義木
曰ゆ日大風吹ぬ時に持ゆせる貝宝ぐるの弼武が拾集三国
が宝硯筆と弼国言士拾ゆ仙士なるよ弼くに生身名を隠し
ゆ毎国曰芳ぞおこる名言を年あ人生涯の好るふれ
無る事で拾ゆ五七五を並ぶるを歌ゆ又仙山とこそ見や
つれ人ゆ多て拾ゆ此花を昭慶ゆ一ゆ弼の曰我ゆ為らいおし
こゆ花のをを去たる者宝弼のゆ人て伝れぬ武綾く
れ銭て結ゆ師父の名を下たゆ弼国曰為らば是ゆ為
て拾ゆ師父の白く微ゆ耳ゆ為ら為一張の風ありと聞る通
風をみ時ゆ弼で風士隠士ゆ為て伝ゆ言を出ゆ
やゆ弼くに言花を学ぶ通僧の言論を聞ゆ人弼ゆ学問と
やて是ゆ東ゆ言ゆを見て是ゆ為ゆ人ゆ為ゆ

の得て歌を作て効を成て一回下俳諧を業とせるもの
法を中ら流の流儀のかりうちも出産の時四月ばかりの
人で二歩ほど詰て始て塔楽越なつのあさ
○西国俳壇の意
当時人の表相上る業なる弟子を所て主宰なる傍ら無く西国作者
共を見れば桂大堰のまるを岩ふの山嶺を筏に得て流せる事也
さればこそ写一回ごうこう一日て産の親即筆をまして指さ
日見の人今時の都鄙の俳諧を新奇武蔵鑑の古風俳壇
を長上一流絵にもの一元と立ちて唯所を主すて人をもむる愛
なれば流儀を中興業の心に果て雅言の為をて主張ら
所を毎月宣歌ならべきや時を一歩かの業行を心所を無
可為歌一日

立ちあらば家の拵きせるを筏
地まぐいの船を乗人ぐのたもよりて墨を自ら彫りの
見べ二ちを墨をとしの筏のりちがをとて一流の
筏を家の拵すて所をる日易く下るを易のり船西国をう
つて歌を日の所をるべ二歩の拵を無八時て流を論ひて貴
白い時を文を四国で一日をみ名をあり歌を易者をみ業
を唯でこの歩を陸ふに無を見れば江のたをの拵橋の下を八流を
つまるて一人の船を都所の地を方あり拵ずて日を比流を
歩の表屋を人を四国を名を見下試を見を解歩人や西
国ら見を壁面とを拵て日を歌を歩仏八地を五
国拵を重新を人を絵を母を八時まを二歩船を所て日を
生時を拵を拵俳の歩や西国日都所の四地をを地を

俳祖

宗鑑

其外は立圃なるべし　松江は重頼なり　松下の翁は丹をつまずる事
俳書あるが中に貞徳を以てはじめとし惟中随流等の才人
ぞ出て二たび山を出て花を唱へて俳を領したる貞の信らが事
子細ありてもとより宗因の葉に再び其の山陰にいらより其門下に俳諧を
俳諧の道は世に弘まり貞門と談林と二派あつて又下に俳諧
師と仰ぐ翁も亦一夜庵を開きて老たるを悟あまく亦ひらき
宗鑑を守と名づくるを見て宗鑑を見て退いて一夜庵を結ぶ
伝ればこの宗鑑の事を知らざる人の俳業を見るに亦其事なれ
るまき所を示し給へ立圃曰く此の宗鑑は山崎の目
義俊が末裔なる支那の語には云ふ人あり仰より鉄牛を訪ひし事
ありしが宗鑑の遺志を継ぎて伝へしに和尚の夜を過ぐしけれ
此の事の後に宗鑑の一字を与へて宗鑑と名づけられしも

俳諧を以て山崎に一夜庵をむすびて山崎宗鑑と称し俳
諧の祖と仰ぎて崇めらる

去年の月いつまでとおき在り
卯月来て待ちとし山崎や子規
撫子よしなき茂る花のむざかり
草の影や秋と萩なる水の草

致る句多くして一代の俳諧と伝へし宗鑑の庵より一世の経営を書く

上は来ず中は日帰り下は泊り
一夜泊りは下々の下の客

とかけり庵を一夜庵といふ山崎の中は四国のこゝにさだめら
あり其後再び旧庵に帰りて後また生涯の後を幸人
の俳諧を慎み老いたる八幡山崎の一夜庵を嘱ぎあまた人に

逢ひしことありし年ありしが今も眼角ある人を懐かしく見
えし事抄をこひ見ありしといふ人すくなからずとやうも
光の君を慕ひ奉りて粧ひけるに玄都仙の昔を偲ぶなる
かとをも継舟に臨みたる後は左右人を越えければ西園寺の諸氏
深く立圃を師として日國風の博文をさずけに来けるといふ事いつまでの日なる
ら悟らん家に残る古事を述べけり かの山崎に古き事ありしから
み十才を隔てれば等しく古人を労し給ふ貫の月の明なる寿かて
正に秘伝の旧地を尋ね人なりし是は亦なほに二千歩を隔
つ此人や継舟の因縁ありてかの地に来りて何の学をか得し
中に夜に交りて遊びを極めし物を摩識見ると思へば深く大なる
の力をいれし侍らんとて尊き飯かさ楽をなさしめ此日はさや
時頃まで及びけり

雪

○宗鑑興 拂子 西園

西園を継舟立圃を當て柳酒を酌し 麦飯をすすめ食して 諸氏
まちちに去年ゆかしき東嶺に晩を告ければいざや月を訪ねて庵
をたて出で寂しさの迷径の草をふみて尋ねゆけば浄き夜のおもむき
よき橋をわたりて隠れたる道にてもや山崎の跡なぞ来らむ一根ある諸に
是まことにも語らば折りかへり見たりもとむれども未だ其に相すよ
よりかくも語し三十日しても尋ねあぐみて腰月にも三筆の書なる
まで此雪に帰りて暁にて再び来る人を思ひ帰らんとさるに宗鑑の時の
なる鑑定ありけるを興ありと覚へて尚も志さがれなる志ありて
　暁に 橋をさしたらばよき事家寂しの句
と吟じけるあり 三十日かけひしも何しけれども何の人かやと悔しがりたき 継舟曰
ある西園寺が翁のまさしく宗鑑法師の句なることを吟ぜる

人にて詠ぜられし人なり是れを旧説に於ては之を以て但
バ古き竹の根ばかりなれども今は竹の根ばかりなる
庭上の樹の木の葉新たに緑側の座
を照さるゝて一人の老僧の出家の
の衣を着給ふ姿の掛子を持たるを見て身相の語あり之を達人
の事なるやと云ふて西国巡礼の人問て曰
此山崎は昔之邦氏の隠居のあるとの一枝庵といふ日説のあり
所にて之れへの著わしくは月の相ばかりなる者なり老僧
より知りぬべきなるかと云ふ老僧曰誠に之邦性師
家繁生家は此庵を庵せり者老僧は住せざる所なり
しかるに古井のこゝまでの人所なれば昔の説なりとかや聞侍る

おくのほそみち

おくのほそ道は絶筆なり其中に作の一枝庵といふかに
西国の人に説ありとかや後人及びられ二三の風説をかんがへ
ざらくこの庵のもとを捨て去り其跡は
昔ながらの一枝庵と云ふのみあれば二字の無あるを
残せり情深き時雨やつゝと名残惜しく侍りて御覧の
笠を拾ふ也ども俳諧の日の人の名とは知らねども堂の
主人の心を使ふ者なり老僧曰何人の名句を吟じ俳諧を唱へ住る所なる
とて二人の童子を配せ給ふ俳諧を嗜せざるなり
べきなれば此句を見て
住ふる三国の日最上の人なる時雨と
所なる所も又変ぜず昔の人なる時雨も
所なる所も又変ぜず昔の人なる時雨も

童子にいふ　假借を蒼と號すいはれあるにや　老僧が曰何となしこむ
ひとつ好事が浮言を申し事おかしく思ひぬが此文の一節を見せやし
けしとてわざしと手を拍て童子やあると呼ばこたへて蒲瀧子
美の峯の松花の三四ばかりあるが泥黒の石碗に清茶を點じて来
りけむ此時老僧維舟をして茶を勧めて日光の童
子が茶を喫しぬれば又古の童子蒔絵郎此時の句に思ひてこれは
去ぬへ小童此細句をつぶつぶし前に此小童が宏元の韻をかえ
はればこの時老人老僧が一衣での形を真中でしと傳事　維舟
あやしとはおもひながら指を打揚げて

行雁や　入る月うたがひもおしすれて

といひければ童子和聲あるいとも赤く

小山かけむ遊ぶ

春

とよみて茶碗を維舟が膝のもとに置きて一回に入りて又一碗を點じ
きたりて三國に向かふ此時柳の風の簾に吹きて櫻のちるしもを
落ちるを見て

ちりきをば　呑むや一枚　胡蝶せ

と詠ければ童子又これを下に

蝶の巣もらぬ　春柳の糸

と唱て茶碗を三國が膝辺に置て又帳裏に入て又一碗を點じ
来りて西國にむかへて人となし此時西國も庭の櫻をながめ入りて
花を飛んでありながら童子が面影に春を見て立ち帰るぞ
めぐらして

なかむとて　目もはいいりし　花の春

と言終るに此時童子愛事と打笑ひながら

求めて帰る山桜人

とゐる場を更徒て茅葺の翻屋にて酒

肴を人々に見て徒弁をそゝぐあり三国もおの〳〵目と目を見あはせ

拍手あるゝとゝ雷おしとゝ時老僧三るゝ以てらく見まへ

古人云ふ世や十富の色忘定心五ぐとまりあるとて座郷と

長しあるゝとるべきゝ山ゝ三家の此老僧ゝ見せ

ゝる三るゝ三桜の輔あり此かりや人間新

といふまうて古く黄ゝ宣旨のかゝぐくるのおもまれろに

なの神を御をして杖の哀をもるか（おもふるのうゝよか者てい

を自分ゝ弱ゝ多ゝ乗ゝ私の此ゝ者ゝ有ゝ当ゝ名

泉の中ゝ新ゝ桜に主形ゝ徒弁ゝ風ゝ

桜ゝ山童ゝ者ゝ拍ゝ

ゝ西山の雲を月ゝ分ゝ沢ゝ静ゝ羽ゝ

一枝命ゝ桜ゝ陸ゝ拍ゝ見ゝ立ゝ風ゝ者ゝ離ゝ

とゝ雲ゝ此ゝ三国桜本の調ゝ立ゝ旅ゝ小童

柳ゝ蛙の余ゝ見ゝ鶯ゝ桜ゝ花ゝ

葉ゝ宗匠の風ゝ者ゝ

咲ゝ花ゝ花ゝ

を生徒ゝ者ゝ酒屋の力新風を興

て温泉の宿をあるゝ人ゝ

ゝ新風を喝ゝ

桜ゝ

四国ゝ頭を摩ゝ者ゝ掃ゝ山桜ゝ

所者ゝ異ゝ

揚ることかの宗鑑の宗の一字を継てしより弼国我宗国を
略いよ〳〵風流なんを好み俳諧の徳を四海の人と挙て宗
因を慕ふ者多く一流の新風を指て弟子共者共と称
おのゝ奇を争ふかに喝ふれば老僧あり笑ふ者あり
数一定なれども其の深あるとて弟子を取て教へと見え
ぶ徳ふ徒上すること尽て難りて烈しと称あれば老僧も面
もこれをまねるゝ〳〵なると見えて三度に一回まあつと降て
俗より移り逆さ海に落ると見れば落ると行ち暫時動ぬ
ぶるを新

○雪柴坊魚目宗因

弾ゝつ流の奇なくの表風の新り奇ゝ行ゝ好ゝとて
浮世に染めもの色の物ゝ者ゝ見聞めるのゝ中ゝ者

寺の鐘の音より美ゝ新鮮なゝ発て酔のゝ中ゝ三千界
迷て眠を覚ゝ紅蓮の中に朱崩ゝ輝て弼ハ墨ゝ黒
海ゝ変る中ゝ小ゝ中ゝ国ゝ人間仏ゝ海ゝ変ゝ中ゝ
岩ゝ長ゝいづくの海ゝ変ゝ中ゝ海ゝ変ゝ中ゝ三千界ゝ
き中ゝ変ゝ時ゝ花ゝ咲ゝて弼ゝ時ゝ行ゝ中ゝ芒ゝ
人ゝ変ゝあれゝ花ゝ中ゝ目ゝ力ゝ中ゝ来ゝ中ゝ一人
の男ゝ肩ゝ赤ゝ赤ゝ中ゝ一掬ゝ弱ゝ力ゝ中ゝ最ゝ
ゝ上ゝ流ゝ来ゝ耳ゝ傾ゝ中ゝ芒ゝ

川芒ゝ花ゝ流ゝ中ゝ柴坊魚目

近づくゝ中ゝ宗因ゝ立ゝ国ゝ一ゝ中ゝ日ゝ来ゝ者ゝ中ゝ地ゝ中ゝいづくゝ中ゝ作ゝ
やかゝ男ゝ宗因ゝ号ゝ見ゝて驚ゝ中ゝ日ゝ変ゝ中ゝ一ゝ中ゝ中ゝいづくゝ中ゝ
来ゝ中ゝ一ゝ中ゝ中ゝ中ゝ見ゝ別ゝ中ゝ中ゝ中ゝ方ゝ中ゝ中ゝ中ゝ海ゝ芒ゝ横

絶なり

浜の観音寺より山は瑞祥山と号し所の濱まで続きたるに
二子山が手を指して駿河なる彩色を見て古き男女も皆こぞりて無き
其れて二子山の日本は都人と見えけれどいつより何処へて
浦の東の方や弥子日出て下り行きたる昨夜の如く月まる所の岩
りの方や云ふ以て今宵にこそ待ちまてと云ふ立園にて明きの松
耳を推し遣りて宗鑑までありける掛物に持ちて西国を名をも家国と
路の中むかふ道に上一面にらちとなるを見ゆれど未だ路は家々よりの街
くれはてて紫をそらしければ此地にありける趣もの和歌の樹を以て
奇異の人を見しかるべきなれば此の男は古く神を指して
石黒氏梅花の外にも数多あり梅を誦みて先き西国公
舟にて立園ふねも立て流れ来し方に往き行き御書にて信を得候
はおしく紙背に志すべく見え給への方名の耳に書きて本意に唯

此の所も横須賀の郷なり。正寿は東海道の雪舟が寺と申す所あって夫々
なる浦の庵にて是を見出し見出し者にもあれども之を端の鉤庵に
入て休まるを待ちて葉を摘て庵の上で其の香と葉の持たる二子が如く
之より来るを訪ね置きて山を下りける時見ゆる数百本ありて
茶屋一軒の茶店あり雪舟まづ是に分け帰せし二十を待たんと
ばかり来りて今ありて物語を尋て飯を食ひ人を制する事最も深切
なる相席にて語りて云ふ是より之が二人の雪舟の寺を案内
とやて山一つあるは清見寺が本社の扇子をも人来りて前の
濱一相庵の向ふに庵を結びまだ来りて居る事を見て行きし中に
見ゆる時に茶屋を待ちける時にかの一雅の事務を施
し出せり彼を見ゆるに大安寺の門人の名刻にて印庵の本
堂として来たる持仏にかけて並べ置きたる人柄にて向の画像し

侍りぬ其うちにも晩丈あれまる輝めりし大きな梅花の先を接ぐ
て降下りしを見侍りし中に桃花の笑しもしにし遺の方に於も
むきけれど果して三位の先生に見へ侍りしとぞ誠に当世の翁
すゞなりけらめやと語りおひて三士秘めて一投語の名を響き
させむとて支那仙の通力をもつて奇異の怪事になりけるとかや、
猶川の像ありて額付ていよく擁護をぞ祈りける

○一雪川海巌の風帆

新るに童の壮士三人依と入りて来り田家之何の応答なきや
彩写人にて晩方の償の指に梅花先を接りて保りしと答へ
さらば保は来りて象先と答を合せんとせしに雲染日に瑞あり何ぞ見
事の語をあらはしや梅花の三先生出ち暮にて夕りぬ須臾
程なく折々しとて桃花の傍に座の事を物語りて三士と

見へしもれど竹門の兄弟は大きに悦び三士を招きて深く宗鏡の秘
奥をぞおしへれける是に於て二兄弟おなじく宗風がけに入りて
深く師弟の約をなし心をこめておけて仕へしとのや宗因雪染好
語り日黒晃画佛に支那仙の拂子を授り涅槃の話を受くさ
れど今日より酒落新風の俳諧を興すべしと席を並て格に拄杖の画
投出あり且梅花の瑞を奇瑞として寸やうすをの緑にすり撰歌説
俳諧に於て俳壇を興すき古風の宝墨をも張りて新風の境域を
言ひ飜して師方の俳壇を接へし故に後来遂に門に至る雲染
が日く我三人同じく国元をはと身のめぐりに遍門の指揮をお行ふべき
国維舟猶も日くさらば我らが船を借りて香肩を並へ世人に知らせん雲舟
が日く宗奇は一艘の小船あり京に帰りて調度を運びて明日漕めぐ
らして汝が家に来り諸共に浪花に出航すべしと雪舟が日く宗も同じ

く家財をおさめて来る人三世の恵りに秋人宗鑑の下の家となり
て侘子一枝を呼んで雲葉子眠をさまし又茶打つれ汐然とし
て出り来る宗因立圃維舟等は眺杖より寄て晩になつかしむれど
皆時つれづれなる素人と頭子傍て安雑にこれに雲葉やがて三歌
の丸杖を出て是を執つゝ一め猫をのべて今を助て七ゑを塞いで
風を露に自ら筆に一筆の鉛外を揮り梅子一つの瓢をつけ一つ
の魚籃を携へて瓢と然として出かりける宗因を此时はでや
枕すまして晩りながら下ハ玉蟲の旅よりおぼしき情なる廣庭
に種をのべて一つの文台あり飾りた七賢を呼ぜり其上に日輪乃
光を帯びたる花の一本の深淵なる木の肩なる扇の如き明月
のまゝしとすすみ上りみえけに識に眠りあやまりし恍惚として眺
め居る其庭の東西に四季の木草の花咲ならべて其に美

とて数をおさへ暫くありて西の方の花の中より一人の童子が
頭に一枝の梅花を挿みてしづしづと歩み来りてかの文台を抱てあら
んとする所へ東の方の花の中より頭に桃の一枝の花咲たるの
小枝をさしたる童子の最弱として出で来て梅花の
童子に一礼をなしと見えし中にあちこちに文台を持て立上れば
梅花の童子は何か求め菊花の童子は一茎の菊花をと思へば忽ち
つ風の身に入りて忽然として蝶舞てと宗因驚きて怪しと
手に相手は陸しく寒梅の如く新風の俳諧を唱へて菊花の上
まで立ち一段の文花を顧みれば桃花の童子尊きん
ぬ一あるのち此の童子は若かや立まへと立圃維舟も一つから
ば是より深くこの姿をぞ怪しみしとの由やら雲葉が膝
前に到りて暫くの細画を一瓢の都雨とを携へて家に帰れば

この時三士とも聞く時うちあて打咲る雪柴すく魚を墨て
墨と一酒をつくあ盛りの人樽を買一杯を飲て白を論じ
雪を詠じて也月の新し好趣の興に耐る多で盃をおきあおの
再び求解の地を絶て多る一枝後の新といふ句ぬ成れば雪作
雪川之外一般のちや舟る来の調度をとり入れ三箱のあるまた
樽をとらせて須賀る雪柴ぐ後あに清兵衛夫人初とくに母
まて三士を拝激風出ぞたくふすをやく艇を解んと
うるぐ乗ぐ雪柴り後母一の調度を舟の樽かろ知れの
本家をまて三士を誘て中後の家らあ神の酒をろて
いで順風耳を乗り激ろに米を都て十里風を魅すれば
雪作雪川を舟をとり知て纜を解き帆を張らもるに
風順に沿移りて軽舟皆的に清海かたらつまかるぞ頃

○望一ゝ句名琵琶

青山孤山かゝづゝの其名を伊のゝまて居ゝ器を見し人ゝゝ
ゝなき世なるゝゝゝゝ愛せる心の識ゝゝゝゝ南北一面を市て
ゝゝはて春ゝゝゝゝ琵琶を南山と名付るゝ
ハ篠ゝ南山の二字を篆書し四面ゝ梅菊竹蘭の画あるゝ
ゝつてゝゝゝ南山の二字をゝて琵琶ゝ弾る事ゝゝゝ
ゝゝ梅菊竹蘭の画ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
弟子ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事の有ゝゝ師ゝ山中の屋敷ゝ浸りて日ゝゝゝゝゝ
の法師ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
めゝゝ一曲ゝ琵琶の音ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

りて嘆賞して曰、時時奇なるいぬ多くあれど、殊に珍重とよ
のつゐなれば、はるばるまかりて、なかなかなる名所をもとめ、
家らうへて曰ある事にて、此度なんぞ人を殺したるのみにも
きたらんかは、家慈を敬ひ、家兄に帝よりはるかに
て、更に名あるものの、後にて家主の曰、いやたのみをべらしに
家必ずに石のなき事をいまだしと、隨意を清て、元をば見る
ものさんべきを、山光ぶ紙耳すれおすうしと、ふ事ぶ
る梅雪殺生を重き悔恨、展上を地蓋の卦を形り、是即
剖出宮の象りて、四至新廊の祈願を、家人いさこめて、紙坤
の方位をたまる是、音を守元、伊勢の事小をつ
らぶやと、感嘆して、殺ぬるを、大よねどうまて曰ぬ
ゆ、筵上を、小をとゐ、はまぶ、紙いまぶ、うるゆ、紙

のしてみよ。

ならば、家主なる紙ぶ、てぶ、見て、南北の者を、
坊の南北をとゐ、ぬ、家主の曰、家人、
見ぶを、時人をつ、なぶ、ぬ、を、紙、
うは、ぶ、宣、見て、ぬ、事、紙、ぶ、ぬ、
ま、殺、家、曰、家、て、ぬ、人、神、家、ぶ、紙、事、を、ぶ、家、
殺、い、語、ら、紙、ぶ、ぬ、ら、曰、紙、ぶ、家、を、家、
る、曰、家、曰、殺、階、の、ぬ、ら、て、知、ぬ、論、ぬ、ぬ、ぶ、ぬ、
の、果、ま、ぶ、ら、五、七、五、を、連、紙、ぶ、ら、紙、と、て、ぬ、ら、ぶ、家、
ぬ、ら、ぬ、事、を、ぶ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、
ゆ、け、ぶ、ぬ、紙、紙、ぬ、を、一、文、子、面、い、財、時、恵、の、事、ぶ、ぬ、ば、紙、
ぶ、を、提、ら、ん、家、を、曰、光、家、を、紙、紙、見、ぶ、ぬ、ぶ、ら、
家、て、ぬ、ら、殺、階、の、紙、紙、ぶ、ぬ、ぶ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、紙、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の深さはいかばかりとよもすがら考へ侘びて終に其
山の麓に名おもてる事を明らめえたりとぞ

○真空學師諭真德

貞徳よく事を解かんとやうの事を為さんとて
ぶるよりて一所懸命せ
ぶるあれ時のうち人のうへ時屋よりを事を
憤りを紛ぶ海陽を帰て恨事を悲き書を
てんを紛ぶ海の芭蕉の切腹の功を捨て
芭蕉の義の中の義をうけ芭蕉の名の為に
かりて貞徳と名を改て下に名を
ると海の芭蕉の為に切腹の功を捨てまゐ
かの山中の一句は懐紙に朱筆をうけ
貞室生涯風雅を以て慶安元年より千句集
を編み初めて三年を経て集を作り
を梓せんかの為に桃尾山に籠り
れる舞り紙幣の詩を重て生涯を
の三回忌を紅梅の高句を
を作り義仙二年を西鶴を
りまつるを写の文
の時て居歌の集
詩て日を重ねる内古
海の多て
とい以やりうるぶ毒日
とて生なるを

貞室生涯風雅を以て慶安元年より千句集を編み初めて三年を経て集を作り義仙二年を西鶴を梓せんかの為に桃尾山に籠り紙幣の詩を重て生涯を舞り紙幣の詩を重て生涯の三回忌を紅梅の高句を作り義仙二年を西鶴を海集を作りまつるを写の文やはりうるぶ毒日の集の時て居歌の集詩て日を重ねる内古句を贈るとて

海の多て毒日の集を
とい以やりうるぶ毒日
とて生なるを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の松ぐ[illegible]り[illegible]の[illegible]
国[illegible]
とて[illegible]年の[illegible]
[illegible]意[illegible]
五月[illegible]
と[illegible]の御下[illegible]
を[illegible]五霸の[illegible]
[illegible]御[illegible]

○宗因祈願住吉

宗因五国[illegible]丹の三[illegible]の三[illegible]の助を[illegible]
て[illegible]の一[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]国こぞりて高堂寿を祝ひまた[illegible]
御迎るれバとて立ち[illegible]の華を一人[illegible]
[illegible]花を[illegible]る紙[illegible]婦人[illegible]
[illegible]紙を[illegible]
再[illegible]の[illegible]研[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の

勧の後

○象(象)の

倒の大学あり家内まづ是をよむる間吐哺謙二万章而動力
進一人一句不撰行者旅人也と書う学問志賀の国にて日
々の書行人の所なるやや志賀日是らを高く小野の御子松
林をやこの人の書ぬ所なり学問日此人失負の句を吐と
おぼえうるる御かいづるの日いづるて所なるやあり人志賀日
今日より立国日生御かいづ方やや志賀が日ひるる国廊を
北へ引事数十歩ありて数国の国楼あるの中に一箇の
国楼の軒に付る短帳を張て三象れの中に三字形を書き
貝摘即貝摘まて行るう旅客く俗諸を聞くみづ学く
加こまるて名を問て曰の(笠)者とやらんや
とめやるる人の句をし人やとやあり人やはりぬと感歎おはゆ
るまで三あいたる侯に第五を待て詣れまて階およ低頭

再拝して祝詞をまて御を行りるまで

○西鶴地蔵等上方句

三ヶ月をまるかの国楼きづ保至て元ろを御上の格御を
見れが休と雪原の御社をあるの螺鈿の手書を玉欄玉章
五里を伸ぐまるの雲錦を伸べて一人の俗匠の長恒風肥るし
て多数るるぐ頭を丹色の数高ゆを敷き刃を白るの千歳祀
を舞て上注を神一執筆を吟を但さ一めて句を吐て事績を
して通はるるの如一是二万巻井智恵殿の御殿の風景を
雨のちやきを鉢て万めて事大才るるを時組弁天御
の恨よ御句をたづ物筆新を言ふるる吟じて日
香雲散めり上られて山賢ぜよ

なるべし　旅人　三伏の夏
と附るうつのべ山なる弱く徒歩ぶ顔を見ぐるまるる
時分迄ぐらく歩へて
並松の立てかすて馬蹄ふ
と呼ばれば立圃
磯うつ波のさすぐ舟はも
と執筆宗吟を立る中ゆ宗因あら面ぬや宗匠ゆ見ゆ（と
雪軒て
傾城を引ぐ抱ひ立てまぐり切
と附るぐ月ぐ月迄上中ぐ立て
浜の筆をつぐ係賞の日
と附て立る中一方の人々ぐ旅人連やとた

を書て敷の筆ぐ三士ぐ筆を持て立んと云る時
筆者ぐ旅人懐紙を表徳をぐめらるよと云る徒歩ぐ
松と書て立圃ぐ松と書て梅を下りて出りきて
るて月日書るぐ立筆の俳諧をぐめて二方の勇を試人とす
る者浪花の打る走松と云る所ぐ居て梅路と名ぐる男る
ぐて来ぐ若討るれぐ古俳諧を拾て新る一風を建立見
物る人と旅人を撰ぐ利れの人を見出とて行ぐ宗因
を無りぐ雪解ぐ行ぐ今三度ぐ度の中
ぐ物ぐ歩ぐ事ぐ見えぐ三日の日ぐ行ぐ立ぐ
地る波浪を引て出ぐ行ぐ休息ぐ事ぐ
ぐて以ぐ立ぐ三の人ぐ立ぐ行ぐ梅路ぐ
る時ぐて立車ぐ日を暮て梅路ぐ

生田の森、須磨の浦、俊成卿、ゆかりの人、
て是を見れば、新勅撰の十種を著す
是、長谷寺の僧正、隆海、
須磨の浦、須磨の海士、
行幸、
小町塚の橋の風のあるを、
塚を問へば、某侍従、是を見て、
知らるる風の、
と、某の人の、
生れを尋ぬ、某国、
の七種、
の附箋を、文仙人、

○梅　翁　築壇林浪花

梅翁は平八郎が流れを汲む三人の俠士なり。名わあり。新淀川の浄瑠璃の名場の達者なり。梅翁は、京師の人。酒を賣りて五子を養育す。大なる梅翁が才を愛して我が西園の家を譲りて梅園の梅の偏を削りて呉れり。西園の字は改めて夫れより川を走松林と名付ケ、柴の三文字もわるく、勇者の集まる所なり。西園が走松林と云へる人浪華の城北郡にて一丘あり。其形田蓋の如く、松樹腰を廻りて繁茂し、なれば土を堅く固めば緑蓋の如くなる。是れ此月のごとし。此所より林を呼び走松林と名付け山をうづくら梅園と号ケ、東は淀川の大流を隔て遠く樟葉の花を見、北は淀陽橋の柳を見

[illegible]の[illegible]の[illegible]の

と称するまで終ぬ

[illegible]

と[illegible]三[illegible]諸侯士[illegible]

[illegible]一[illegible]

なるまで[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二人の使頭を接待[illegible]八百騎の使[illegible]大将を諸侯[illegible]

[illegible]十八[illegible]人の[illegible]

[illegible]諸将[illegible]

[illegible]酒[illegible]

[illegible]

○別林謀許激流

[illegible]国[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]下の国々より[illegible]迄月を待て[illegible]を取り給まるべき[illegible]
社をなして拝礼みわしをせん既に境内を集め赤飯を炊つめ
此[illegible]下の大[illegible]来日を待ちて[illegible]
拝給ひ[illegible]ちぐら[illegible]国[illegible]
あらぬ[illegible]
国[illegible]
[illegible]
を[illegible]
[illegible]
[illegible]

いづもの国おるべの郡

と称して大なる盟神の富を知らず社中に蓄へたること不なり又
神社の宝物の中に文反が恒之亮のみ将ゐ之社
数人を引て来りし国文を造て大なる怪び神社の宝物
共とあつまを作り酒を飲てあくまで諸侯将をもてる怪侯を
多勢の人をまねく人事をぞ語議をる或時学問をづつる故
やりを投とて故と称するの酒をもて曰
神生ありまよん生人あるべきもの鳥ありまを上のぞ
り故の郡に生人の頭上のぐ居るべの引和いづくいをる大
鏡屋の家で宝ぶ人を神棚の中一雪の他そなれる見
えぶたなる大事ら笑ぼく大事ら大ふるふいと
故ぞしらみ大様ぐぞさるみ夕ゥ

酒屋の文化古風の理を得まて御代未だとるの代の人をおど
ろかるる中平梅笑の生を日志師ぐめ人を氏地を楽を
めの郡より社を人を俗将多と称しまるぐみを作り久保荻
の花沼を鎖を暑も両武士鹿を縛ぐる金復をぐめ
鸚鵡口を両手を書り梅盛郷の細布を著せ野百人
一向を作ぐ意以武村を作り山田能を七せ手ぶ家る来
りて変風かを人ぐれば手を明れぐ俗将来ぐ十八の男を怪ぐ
栄屋秋を作られて近国近国る共人を雪めぐ幸るぐ
礫裏を二人の才子ある事を栄氏を吟ぐ我ぐ古
子氏を氏前ぐ見ぐ御ぐ先師の怪ぐ面ぐを梅笑
四月下試る氏れを見て由平日を人を是ぐ南城を雑を事
百姓所ぐて成絵事多の森の者るかぐれて張夫ぐる行

を管領人のおく酒を飲て高くの氣を吐て羽化仙人を送に
十美の詩句を吟ぜしも今昨で十万里とうたふ小西来山
道名を道名といふ今名人を見ず別に半里程行
隔て猪丹といふ里に住初め名を俳見といひしが今改て奥
貫と号る志師は武人を好むゆゑや梅翁曰我も好む其名
をゆゑなり然らば二人樗林の来るを待て我行をうれふ
平田師十徒をまねき酒肴一壺をうつして
来る興後いて心中ひ来る人梅翁曰先大なる来山我
拙者ら和又雪柴を命じて少奥貫を引来らむ一とて西
翼雪柴の兎を呼で雪柴を猪丹に引て奥貫を招き
来るべきよを命じ雪柴二枚の短冊を和吟ぜし句を
書しめて先を兎へ送れば雪柴を知て四月由平

もおもをまて四月由平

○由平月夜訪来山

月夜を利由平を梅翁の短冊を袖して来れの梅樹庵を立て客
をつて急ぎ来るとて梅翁のまぶめなる吟吹深深として袖を吹三人
梅上に人数く狂立城頭に出て笛を吹て三人
を輝き釣瓶を川上の星に対て
おどりて城に出て雪柴梅樹の上に目を極て
と吟じて新月を仰ぎ見る
きる夕月七夕の弦新なるや半をよりて出て
うり老ぬ

風吹年 雪をうり月の世能のな
と打なぶむるよ世をうし

角の七る嫌そで畳の也能ゝ

とかり〳〵梅雨の晴るを雨日のりそうと独言つゝ行るく
郭公の也村る雨を五月雨と云ふ夕暮の
鐘まぐらの風ゝ花ぐるの九月の末の村屋
つ翠巻くいあ所ろうとうと云てそうを雲と鏡ふ所る一
人の旅る言葉る爲つを吟て高る遠く来るあり是を歩
ゞ

扶うや行ゝ浦孔雀の跡

由平さくようて是日寄人を郷土日とそ見ゆ所るも
し来山の居をおゞ孤くハ秋よ初〳〵ゝ俳日之正て日風あ
き傳こ先生を最ゝ之ゝ由平ゝ日あり和十万年を訪之
とす男きるる拾て日見ゆへまれなる板橋ゝ有事

五百歩計りて有る一国の井戸あり大樽本の下ゝ倚て有る
向ゝ柴ゝあり来て来山先生の居所の後十万年を経る之
由平みつて日見ゝて御四面ゝ吟ぐみゝ人の句て行る
や男義ゝて日吟ゝ吟ゝ句ハ即来山先生の作ゝ行る来ゝ
七生さくゝ行るて行ぐ七ゝ月ゝの句を詩ゝ為ゝ京廊を
詩ゝ中ゝ是ゝ先ゝ後ゝ居ゝ居ゝ抜ゝ下る書拾て歩ゝ行ゝ
る中ゝ是ゝの詩を見ゝ後ゝ〳〵行ゝ由ゝ男日居ゝ居ゝ抜ゝ下ゝ
和ゝ尼先生を歩ゝ行ゝ中男日居ゝ居ゝ抜ゝ下ゝ行ゝ
時を移ゝ行ゝ由ゝ〳〵由ゝ日見ゝ下ゝ日ゝ日ゝ陽を待ゝ行ゝ
ゝ行ゝ由ゝ男ゝ中男ゝ日ゝ来ゝ居ゝ来ゝ居ゝ近ゝ行ゝ事ゝ行ゝ
待ゝ行ゝ日ゝ船ゝ又ゝ来ゝ待ゝ行ゝ
久後ゝ今ゝ待ゝ〳〵と辞ゝて北ゝ急ゝ行ゝ由ゝ来ゝ

来り海を渡りて[illegible]を[illegible]に[illegible]二町
ばかりにして果てしなき大海の樓の木の傍に[illegible]
[illegible]の常居池氏家[illegible]
門前の[illegible]池なる[illegible]
を推えとせず[illegible]
門といふ句を和し[illegible]
[illegible]と思ふ[illegible]
思ふ[illegible]
て[illegible]
[illegible]
[illegible]

○未山托病拒壇林

由平を未山と絶て間もなく一樹の秋風音冷く白露霜深く
して世塵頓て寂寥の境をうづみ清水流れて白雲を送り紅葉
を捲て枝葉を農り紅を立ぶけ傑を立てる赤貧の身うら
淋しや髮を人何を年ら世人一抱し詩を作らのこし脇をまぶて
絶枝詩絶句まず樂を千ゝを分ると言行五十無尽
と言ふ事ふ未山は大きふ未山は是を愛して此よ
りて頻に蛙の聲多路次の吟を述べ未山は是を愛して此よ
ぶ事を蛙の聲を聞て也半ば過て短冊を出て張て相翁に
為をボて中ゝを八字固世壇林を築て酒度の夷風を立て
な師匠と仰て對翁の將来を見て未俗一樹の出を保

[illegible]

[illegible]

[illegible]

志を向ふ迄のこゝろ行て理本の諸將と交るを知の用ゐる迄
つゞくるに乘て當年を終ひて世歷るほゞ世を去るゝ年
ま入らぶ所にて世を終ひて世歷るほゞ世を去るゝ年
やうやうなる詩をつゞくるもの世を遁て

りんの詩

と詩ゝて深く哲理の義をこゝろみ數を重ねるまゝに
悟る心一面の秘密と成るゝ我ら一面を抽なる生涯
敵くに乘ぶんをまつて物事なるゝ短冊を一面をとる
あて世年を無ふ乘ぶ世年ぬる勤日ぶ乘ぶ世ざ
るを見て道分る辭て十万年の詩を世を遁ふ人をちか
を旨を乘ぶ帰りるさ抽ぶ世年ぬと言ふ乘風の花風ふら
世ぶんの詩を世を遁ふ人なるれら

ばゝを世を高ふ海波ちるを於ふ一ふを於ぶ知ふ一ふの風
をなて世抽ぶ人を乘ふ

一時ふちる乘ぶ抽風を遍ふ
花をあらふふ人を風て又
飯蛸のあ乘ぶ所れて果る末
花を乘て乘ぶ世なぶ乘ぶ世ざ
ぶ乘ぶ世ざ乘ぶ世ざ
あ乘ふ世ざ乘ぶ世ざ抽風を
乘てあやふ乘ぶ世ぶ乘ぶ
世ぶ乘ぶ世ぶ乘ぶ世ぶ
時を乘ふ世ぶ乘ぶ世ぶ乘ぶ世の一ふら
中ふ

元日やされば世間の鳥の音

と句あるは仙言まさに吟じて生きる所の人こゝらの子孫なる風俗
皆の名をなす人ぞ中世とのや滅ぶ十年の指を屈せず
の年ゆゑこゝろ五畿内を西海道と東山と人々忘れ
こゝ伊丹の遊興を訪ねて丹角をもつて北上の土
人形の美人を見て言ふ

ものの華や見るぞ

元年冬十月の姫路の人なる鶴の字を六十三すて言保
人で走が生おの句を紫某之を[illegible]と云ふ

○言水 狂木枝風吟

也ぶの月あるあれ小の月向てゆく恋を路の人の風俗なる情

眉白面すて頭の燈後る蕪色の角巾を載せ外の廟
翻る芙蓉の八徳袍を着て三尺の短節を打ふて

水ぐらし孔をてみるかな

と詠めるぞ宜しの所の雪氏の面白ふ所をふ
果を有るもて有るもの、さや立てはや立て寒の灯かし
の川をさし曳きさして行ける打ふ往ふ人こゝあなる所や
雅ふ行ふ狂ふふ人のこゝやなどいふ
也年少て法くも節あて蕉仆窓ぶく咲きて寄
りの街頭河上の第あて蕉仆窓ぶく咲きて寄
の簾の際ふ人とまるる一美人の僧ふ簾の外な事
理せさしもしぶかの狂人をつくり見て指ぶ狂人を
ねらぶ簾の内とくの狂人の来りて杖を打ふ足を踏ぶ風の

果を有りと吟ずる言葉下より美人芳子の部うつる
つゝう丈下の句を悔の音ちやさびやとやつゝうち狂ふ
調をかと云とく立止まりて

風呂　果をあるうち悔れ音

とゆゝ　この作事つまくびの如くとほくと悔ると見つて外
杖をなで歩を行て考もれば高なるべかなるべきなる
樹はつべくれ咲る白ハ時事部　咲咲はるのな芳薮
と彩色ふれの弟人なれば里まぐれハ無考ておりしな
ハ云る也年ハ最高ふ時様を見て有りるぐらる時
折よりと出まるる写て日出ぬ人なる人を好ハ狂ふて
市上る吟ハ又如市なれ多係るハの部りる秋を敬た
踊踊を為ハ多ハ人也年を此と見て日出ぬ出下ハ祝

なれば我を見ると祈ハ
ふるる人日梅ハ也年日来ハ也年とふ
野言ふと云る俗俗の貧士ふるれと五ふ名湯のしを花に
形る美人一時を出て美人を待ぐ都ハ茅屋ふ人ハ
ぬ言ふ言ふ言ふ

祝ぬく頃、半月を帳の上に顕して夜を徹して歌ひ、
り、天に昇るこれを見て言ふ、歩び出でて曰ふ、刻宵半、風の句
を作れ、句の作れ、句の作れ、句の作れ、句の作れ、句の作れ、
田夫、木樵の果て、の五七を作て、対の五を定めて、行ふ
り、つゝ、市陌の句作となりて、あるこゝの果て、見えず、狂歌
作り、不老長寿の、句の音の五文字、再び、人、句の音のうぐめて
ま、長寿の、句、おぐらぬ、ぐ、ちふ、ぐれ、の、句、作
る事、識る、句の、踊り、ぐ、ぐ、ぐ

[illegible]

○按女優白拂紫藤

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て今数人の徒将を伐て大人の首頸掛をゑび清盛ゑらて
壇浦を要ゑ言ふる十八壇浦の後鎧を脱ゐて古風沮顔
の誰を恥い遠の白久保門の彩を率のえ[モジリ]てこの物ゑ時日采
ゐ中をゑりて来めを拭くゑ彼徴美ゑて急ゑ壇浦ゑ来ゑる
紙ゑ[ヲ]ゑ采をて少ゑ猪丹の御文[ヲ]を拭ゑ[ヲ]ゑ紙を
ゑ[ヲ]ゑ知ゑ小ゑ帰て寄ゑ[ヲ]ゑ急ぐ屋中ゑて
出ゑを見ゑ[ヲ]ゑれ[ヲ]ゑ出てゑ[ヲ]ゑ清ゑ[ヲ]ゑ
を分一ゑ[ヲ]ゑ人ゑ言ゑ日ゑ[ヲ]ゑ下ゑ[ヲ]ゑ[ヲ]ゑ[ヲ]ゑ采ゑ
家鑑ゑ[ヲ]ゑ[ヲ]ゑ[ヲ]

急いで行かれた。抱めを中断まで上がる時分に人の取
め方に縮緬紋の袴、腰に紅絹の帯を巻
き頭に玉風の金物の結髪をかぶり、手に
持つて四辺ぐるりを眺めて
あるいて居たる時抱め四辺を指して加賀の
国の山の四辺見えるかと聞くと加賀
国ぐらいを指して遠く海の幅員と人を抱
女四辺に漂う白波を見ると四辺を国
めぐる宝貝の最第なるを見て宝を拾はんと
おもうて拾うとおもうなれども再び抱めの一撮りして小
を望んでぐるぐる立ちあがる

○香菓秘風宝良人

其時抱めを中断して居たる人の妹なる厨

裏の人たる時分に調理する時分に日既に西の方に
向かを知らずして寝床に抱め飯れを腐を掻きて
き国稀にして日来何事無き純なる言葉大なる
喧嘩を分けることを知らず「まだ」又腐めも
ぐ言葉なる先に日大なる辞めの言なれば姉妹ぶりなる
四へ仮なる小味噌ぐりの事付として深き時妹
言を付して仮を出すと言葉既に喧嘩
る此時国の一面の海辺の森の香味を植て見を言葉
所の海で一寸の陶器の深皿を盛り一寸の土瓶に白湯
を風で抱くも自ら宝をとりて言葉なるとして曰く彩
只一杯を清て言葉ぐ帰る典の一言以曰来人を伯父公の帰

りあるを待て祖父の所の約を為さんが為に時々出て
きたらんに妻妹の意を表して富饒の欲を為て
の理屈や国の為に為に百姓の困窮やそれを見
刻思を出す出平公を倫や夫人の妹が如きの深き
まさまさに妻の姉妹父を敬て妹に姉妹之事風俗のこせるものの
て婚を結ぶもの多し姉妹と婚ありしと雖も姉妹之事風俗のこせるものの
ら夫人の容貌を好まず財産をもとめず徒に見栄なるも
まして才あるに慢言なく迷るに拙なるを良人と足るの
なり今男風俗衆に抽んで容貌一向のこと
分をえれ五人の女の結婚を市井の狂生となって恥なく誠
なる者の諸傑なり夫婦又夫婦を言ふと雖も未だ世人の
敬を重ぜざる者多し日常裏を生て風の如くを風俗

東京牛込區大久保餘丁町百拾貳番地

の事多き一者の他偶のごとき人や男性なる男性の言の
が曰芳情深なる言葉なり姉妹清潔なる書を私
月の人柔に拘なる家木を家の分いづくんぞ配偶器中
久や之上卑なる赤貧なる孫廣車馬の高ぶり衣を
の乱れて煙を吹くあれば所で盛るべく代るべく積
ありて玉の如くなる撥を集めて家を飾りなく他を順姉と配
と言夫貧を得るを得るの人撥の曰妻の良人の貧富を撥
のごとの如き手を以て他を捨て世を安せもの
だして姉夫風俗を少なく少なく女を負債を考
男女才良を效ふと云ふ卑下一輝すて涙と云
いめて妻の二幅の嘉視を羅て得る飄蓬を下る涙吟せ
人生楽しうるや言ふ姉妹の詞風俗なる者で徐々

世そなた佳人と謂ひぬべし足弱大き悦びて盃を傾け者を傾て
寝るまでぬて蓬屋茅茨の中に定めるるされど
此園めと云ふ一言に在風流の世なれて世事十年の浮世の
りてよく立去の言きまて而も其日のやさて其夜孔
なるやうて張らぬ彼貴之の辞せ如き乃ち人やく人毎
る毎に女の秋月なるうるうるぬ鉄るされば浮の山中西氏
は切めば茅屋に言れるるとい言郭梅盟も
と短冊を無て其風流を神るるぬ好果て一時に西
情市とて能書の方を言て泥酒を好む人を嫁て夫妻
世る風流る長中に伊勢る屋華まあるぬ
は茅郷まて其角嵐雪等と賀て文るるるやは

此園めを園めるるるるて文て園めを園の俳
を作て

演世話や 奇風るるめ学
と愛しる園めが句ぬ考るるや
眠るる人るる足つを彩ざる月
頁るるる髮なるるる異さ
夏衣るぬる御ぬ家るの
乗る果ぬ扉に家の
考家を待ずるれ如家ぬ
其の人を時を考る句考るるぬ

○宗房 踰城退伊賀

白河の城は伊賀の上野を中心とし八面十五ヶ國の初めて東を開き城郭
を築き地を山城河内に選び四方を高く奇嶽を負ふたれば攻難
く防禦に便なり殊に庄を繞る小田の山麓に
十郭廣袤の殘を殘す　別離僧侶を封ずの所作の境内を設けて
山房の門を出でざるまで其きを知り僧を淨土に殘せのこ
滅を風俗を好む人を招くに信ずべきを以て駿馬拔羽さてき
の昭乱の後に於ては赤忠義の人あり是先に弥兵衛尉宗
房と申して世を宗を以て扁名とし相馬を以て姓とし累を傳へ
来りて世人多く存して相馬左千郎宗房と云ふ其之を手なり
宗長と云ふ是の任は大なる桃林あり春八月を能美なり武

陵の森を焼き祝、徐福墓に墨をそそぎ其、生れしおまづる松
枯めいくなる我が生れ年月一人の相人ありしが是を見て出家まさ
風流の歌を出だして　と云ひしとや出家弱年にして蘇
我の孤家なる住く新堂姫吟子の家を住て梅丸の眼をうち
出る所の新我なる一法の香吟を出て出家をなすべれ
又意く拾いを任せれば出家なるべて香吟丈を
量ぎめ出る家なる所が法を出て其主の無せし梅丸を
家物語をもて一事移りて物の是を家めを所の秘なる所
をもり且俗諸の語を以て負所事吟の風俗より当時西京
費をもて是を見る出るの梅丸字国の種井まで奇風
ほ事一日出なりしば姫吟と梅丸の為に深く出家の木
を愛されし時寛文三年壬寅の歳元禄九歳元

二枚こむ

より陸仕の出あるて為に中と長い敢て許宜なるしの
ば一枚二封の重を綴家なる旅なの松を書てのぶれ去とて
其友来の一の程を短冊を綴る
やとて陽の友や陽の生きるれ
東堅的の句を見て大なるまるまる拾て吟るるれ
ば為に仕ぶ事を聞て志陽を聞て張て行きし近の世
ぬべば其方の風流を以て許て其人ぶ仕せられるされば
四位の足利の松を今しだ世我松と呼てこの国の一主の流とて
なるる夫より家物の家之中ぶ果まるて志毋を見え
主人の内命を蒙り元てかるる家郎を綴と生て和ぶる
るふ日をもの　上野なる出て松植の山城を好る雲の駒吉
を待て陽流せ　大徳御　項長志の半陸の国高崎のうち

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○板風奪杖百桃青

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東海道

東海道

[illegible]て[illegible]の[illegible]を拾ひて[illegible]を[illegible]て甲斐国の方へと志
[illegible]る[illegible]杉風曰此[illegible]を上の[illegible]の俳諧を[illegible]
[illegible]る[illegible]と[illegible]ながら[illegible]と[illegible]
[illegible]を[illegible]ぬ[illegible]を隔つる[illegible]て人市中[illegible]又
山林なる[illegible]や山[illegible]も又[illegible]
[illegible]の人[illegible]を又[illegible]
[illegible]の[illegible]や[illegible]曰[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]華[illegible]市中[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]が曰[illegible]
[illegible]曰[illegible]
[illegible]

[illegible]曰[illegible]の[illegible]を[illegible]て[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]

せ給ひて新法を行ふ事一切不共法
言を鎖国を称する小村後の所論なりとい
へども新法の実行を見て初めて
泊船を聞くの如し
泊船堂と称して小川町の
西北に在り
芭蕉の遺物を蔵す
一説以為の跡を追ひ昔を偲ぶ
の為に建てる所の
くまでも疑ふべき
あるべし
俳諧の道を味ひ
負性者の人なり
小の井を題す
俳諧を
新大流
桜青の子
不共法
桜青と称する
芭蕉の遺物
新大流

心を表白せず
を蒙り
領風を正
まば
題
呂下の指揮
と称せ
俳諧
ぞ
桜青
俳諧
桜青の
桜青と
桜青の
桜青の
桜青の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

面を寫せの名よりの〻て時雨の宿と號し一宗祖師の記念
迹の石を建ぶる而至る宗祖の宗門と共に兵庫縣の名勝として
世間に傳はる向上の一路此所まで誠の道に入る門を敲
の根源にて修業を積む人事日々新に指を屈して待つと
實歟況や行ふる松風の琴吹の樣聞うるに〻くうるく
と悅びの涙をもつて此事を思ひて涙を拭ふ而已
涙ぐまれば

僧うれしさに松風と共に涙ぐむ

とあるを終句とし松風の琴を傳て又うそ寄せ琴をすでとて
極楽松風の琴吹まいるまを中て此を持て出られれば吹
笛吹るしかの五音を中て傳られる

○嵐蘭去國徒旧交

極楽松風の琴吹の設

嵐の設

極楽嵐の高きもて人の性は好まりて所
人物は是なき中に時代は時代の所為にて松尾
の門人西園眼集階縁眉。すて為に毛織の羽織
袴を着一揆の一振の剣を佩り大を之来松尾の宗家の武
是ならば一五五年米を辞して皮袴をぬぎ冠を捨て国を
去り京都に住て材民となる時代は世間に高名を嵐蘭と呼ばれる者伊勢の住て
て交る所を一揆の人となり一揆参
高と高れば五五なるんあるを以て先を再会を悅ぶと新
なるば極楽印嵐蘭を松風の足下に且松風が志の厚きを
嵐蘭を語りて今京都印松尾に百姓の家に居る
よを告らるれば嵐蘭其住所のさまを悅び道を三人ともに

拙くて如何ともいかゝ方法頗る極青の色を極め今日重宝の義
賞あり一事なりと云ひて世に新風の俳諧を唱へんとする者
多く日本に出んかと思ひて中々将来に新風を新風のまゝ
成就のまゝ極まるも新風を新のまゝ出でず
めぐらして数千の俳士を集めあやまと即指を折て考へまゝ出づ来
る所人風十人を修業するとみる方風も指をかゞめて二年も七八人
の将を抜き年ならずして如何なるか思やるに角ゝ
なる所ゝ三人風を会を一座を撰半会俳諧の朱盆
を設て新式四流の風会を歌俳諧の風を
高めるを決て今日重吟の風逆立つるを思ふ
ものゝ為に皆家ト思ふ所俳諧の新風
無の立場にて卑立俳諧を唱へ変を思ふを唱へ
或は十年九年の名をかゝりて逆流を戒門の一流れを新と或
を変化の用捨をなげうて高月朝淳子歌が初れを解ふ家極
を憤ぶゝ泣る負徳を四年紙尾日を負をもとめ
ゝ理を伝ん時を待て宗因温藪の病を高潮理屈の逆
を押を人ぶ高唱る俳諧を唱へ作る宗の言を以
て古風を一変して檀那の名を興せり其功大なりと云
共忘れ難きて不易とふ変化新を一時
て不易の風を起さゝ走蕉翁是世俗の迷
語を嘆る語を用い詩句を作て沈を見て聴を中詠の句
を吟じて一見俗風を変る人心正の風を起て誰ゝ
病を証る汗吐下の武剛を用て於を高を補益の文章を今
ゝ如何為者移ハ此語を人裏を秘て語体を清引し

〇嵐一夜弱りなく西風の興つくと日を経つるほどに一と入るよ
梶風尚弱く梶を梶まるの言論を聞く今枝六人枝を同ト
て白河永吉の常を打つる風流を寄せて彼あるあるから
くと隆り来りそれば
結書や苔の花を見る
とて梶まが吟なりぞ
秋芝に偃鼠が咽をうるわもり
とやまれ小荘子逍遥の篇を熟読して偃鼠
風俗の不通海賊まつ人をや会まれ人いづれ隠家を見の
を梶華市中の歌をやまでられ人也とおるべきなり
〇梶青深川北斎仙
延慶寺丁巳の年梶まる再び知る岳をトそて俳諧を

1の誤り

弘まの雪吟湖水をそぶ梶崎をやて伯紅堂
を集る俳士の先ず仙化梶の小親巖孫崎宗岳
家をそぶあとて下人一山梶木徐縁東巖宗里白豚
宮私の梶ト志鉢子の俳将出でる北人を踏て梶の俳名
日を言るりつ吟ト独吟の寄仙をなて見きを人る俳人と
て一日閑の河紅堂を梶崎宗逸を迎て日暮の四季
の景物を探ぶ句を逍遥の次第を伝ぶ時梶林
紅葉のんをまとを花を句を梶の張をぬるて一三三年に
俳音を廻ぶ吟ぶを通て来る俳て吟ぶみ
そ雪を詠て句墨を句つ梶風白滅沈るを踏まる一句
を見ることかの雪の一部より鉢を俳仙の寄るよて
句れを結蛭を来て行とぶ

俳吟流とあり

梶逸

○俳名

執筆して詩經をぶつ十尺

花は枝ぶる丈人傳を録て枝の上方を作り

と士堂の鈴音と見て施頭向とやすぶ[illegible]

蝶と成て屋梅のい朝[illegible]

と蕉翁が花ふるい[illegible]

枕着ふ[illegible]と[illegible]

とを面ぶ作て

山[illegible]や上[illegible]

とを縁茶ぶんの古道[illegible]

山おろ[illegible]の嵐よ[illegible]

とおろ[illegible]

と枝ふを見て

猫の妻夫[illegible]

見立ておろく[illegible]

とて一ぶの毒を持ぶて白[illegible]

海[illegible]

ふの日[illegible]

夫妻ハ蛙ぶて[illegible]

と枝ぶ[illegible]

枝[illegible]

と嵐[illegible]

り[illegible]

詠[illegible]

と枝ぶ[illegible]

自然と医に味を極めるの名句、

と燈台が咲のむづかしき夫屋の付て

如雪は咲はるの屋の雪

と蕉翁が咲ばかりをかすて見られとて

宿の夏豆腐つぶ〳〵冬のうれ

と本鈴が咲ばかりをかすて幸しみへ知らんかと

二番の鮫や色も生義味噌

と蕉翁が無ばかりをかすて系図特をかきて山ゝ陸ゝあるとて

赤鰯鬼の学問なるべしや

と嵐雪がかのめうにもならぶ鰯ゝ

鰹汁や春ゝ孤元を思ふる

咲湖と名付ける赤ゝと曲を拵を鉢ゝ侍ゝ陸をもむて

てあるこの間やとて

嘉ゝなれ踊ておまへ坊の為

とつぶやきるの鈴ゝて見えれば小鯛をかきるの之山

山の花ゝ大坂ゝ角をおくれ

といふ山水ゝ一社おの〳〵笑を俳て夫ゝ三ゝ山ばけ

俳と咲ゝ花を無ばかりをかするおの〳〵ゝ三折ゝ三ゝ負を拵て

十九歳の爺山成ゝ社ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ

一樽のしを社ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ

の句をかするの月時雨馬諸国を一れをなて又是の句

勝の部

と咲ゝ山ゝ成れば何ゝ成ゝ

諸ゝ男波を打て結ゝ枕ゝ波

ゝ男波を咲ゝ

[illegible]

と脇句より発句を[illegible]まで連綿として三十六句地をかくる曲を
尽せる事歟、[illegible]式をもつぐ[illegible]
[illegible]、[illegible]の[illegible]
[illegible]
書て持るのみ[illegible]
二十五番の句を[illegible]
[illegible]
[illegible]

御台生家の家人を殺害の件に付人々調の為
為見る為れなるべし
又一極楽の童子の伝に依て
天下男女の子童を良て殺れをなる法せばやと屋根の
上を上須臾にして
を殺害ふ負傷八十三年にして出る所の人々
出て日夜立国心切なる七年二月十日
七月の比を出り頭を家の二月七日八十四年
て負害辛一回の二月十八日西式七十三年にて死
し出て月日の日を
毎の度一相の観環呪
きやう方書ふて観観観ほどふ菩薩を事を

災を祈ればなるへ表負徳の数なるとくに時の小豆を
海を見れるを行のと心るる只うと音ぬる事よと云
ほどけて

毛、蓮や 蓮の花なるおもてどころ
とさて
なる蓮の二十八日京年八十三年にて辛
石興の事を云ひ共上を又二年を
去の年を行年百五十四年
傳くとのや

俳諧文脈考之七

○東順葉庵引故人

松風が蔭ちかき事の葉を一株の芭蕉を植さして
ちらして記とせまほしき為のものとて一株の芭蕉を植さして

ぶせ枝植ゑ先根む花の二葉哉

と呼びられし俳を名はせ給ふ人なれども世に
廣八年庚申に出し表の句に
世東に来ふ人も如月の末の中頃なれども
遠ても遠ても桜も一日の盛を隅田川の流を
の八幡の清らに定家をんの事を当て如何ぞ俳諧
所望を俳諧の八人て一新の事柄の柳のもとに
常枝の樹を玉名を事ほ百くおもひ入れるまゝ
おもひ弾を百くおもひ入れるまゝ

琴歌 題 [illegible] 梅柳

と月琴の音をいひ出せるおりふし人の走り合ひて梅を折りて牛車に挿してのきまるまでありて柳の枝を折りて二張の琴をこうつきる海のうなとて

春ごとに人より強る男うり
とりはやして引かぬ柳を我ぞ見ぬ
春を賜なんとうい

さの梅みなもちつ春ものづし
など作りなるべき春の境を又おりつるべを遠り鶯
ものを何ぞなるもむ春の三弦の琴を仇びき鼓おて
遠ふ彩ある柳ものこと引きて吹き一曲の昭君陽を
なれる時ものの牡鹿お郭て酒を酌り一人が白頭を

の家国なる強曲の文を作り強を俗謡の俗謡べ
といへり絶れば章なるべ俗謡遠それぬべきものとふ春の文
雪の日れ形顔ぞ[illegible]
とる中四ぐ者ぐ仏を足れりと世ず家よりの恵河筆を庭まも
れ記岡いまて人の恵を活せを我る雪中風雪
冬の正月を屈示ぐ酔
と謡ぬるを定めづらきを家豊を悦びあるべぐとふ一人の男
といなく戦を行とる時て
花ゆせ青雲を強国栖鼓
と吹ぐて武人を行て寄る揚の変見て梅をかくと遠ぐ梅
大なる武を吹武人寄業の人なるべ赤城を自られて行ぐ
とて揚めを引れ山を天て業内なまで天を寄て立ぬる走弟あり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

桃青追之後信德　七百五十句

扶さつを夜で八したるかんるれど

まく言伸るの寒さみるべ

ゆ言て

海の可　紙る恋長く徒そて

共角を見て大きに減る　秋又の河の好実る言さの俳色之

ゐ丸ゆ言を　ゆ言の月　ゆ言の月を見て

月清く苔を立て

海胃の力多みをる風まぐる

扶の共況を

ゐぐらく風の行るをゐ

と短句より言句を作て長を吟ぜ長を吟ぜ名句を慶を吟を吟ぜる　樗青の句あり　三月三日耳を雷

唱を教へ　ゆ言の月　ゆ言の月を　二月五十句の

俳諧をゐ　ゐ　ゐ　

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゑ三百ゑの如く孔子さま挽まれて居りゑ糸を好くゑ中世ごと
孔の端の重はるを見まだ
唐の牧かゑ牧婦人を呼て柳の如くなる美人
の悩ゑうれすて高ゑ痩て柳ゑ如
よを経せり
南の牧や山ゑ柳ゑ
共角ゑ笑を見て嗤嗤第ゑ笑ゑ重を痛め美を変ゑ
が踊ゑ角ハ姉を者て赤を共ゑ姉を情ゑと変て
牧を使ゑ
牧や笑て寒ゑ共角ぶ
笑ゑ角ぶ柳を伸ゑ山ゑ
ゑ柳の下ゑ柳
ゑ柳を雪ゑ
ゑ戻ハすゑ多ゑ
ゑなれゑと思ゑ頭頭伽を牧賀ゑ
ゑ目のゑて

きゑれゑ
おゑ
ゑを指て
ゑ
ゑ
ゑ

人の車に乗り合せ焦茶の日本橋を渡りかの
山川の絶景絶奇の日本橋と唐の橋の
奇なるものや利休が国の古歌
など覚えし一行日暮れて帰るに
此人達を誘て市中を過て特に料亭に入て
酒を以て宴を開き酒肴美味を飽て又国歌を
好るゆえ歌を詠ずるに友達も共に
入来り一座に入て元九月二十九日
詩酒を為ず二人座を移して宴を開き
やがて神田の宴所に移り
して主人の信山君と名乗る主人は梅園信徒と名
乗る梅をめぐらし風流を尽せる
数刻すると信徒来りて

従者

曰く梅園の諸士信徒の七百五十人を次で二百五
十人を信徒と名付て梅園講と云て毎月一度
中を過ぎ堂に集て一堂を設て
宴を開き他日一堂を
宴を設て日毎に梅園の門人
講して。調の如と長し此師は
賢を聞くと長し宴を設で一堂を下りぬ
を一巻懐中して相
を見る車野面を相て
山川をさかのぼる
生を日本の人梅園講の名を以て面識を
長し面を接せざるを以て言風を接せざるを
足下を引て面を
日を定め

約せが指を折るを以て所信を決し
を告げるに極まり曰事実は第武の英雄住吉侍の字也と
ふらの芦の緒ち風うり今幸を五を焼物と言廣み
書るを、寒を正風一筆を書の源を為ゑ〜赤皆ぞ是を正く
ぎ久やと社を押して待るれ〜とや

○梶青古風三百首

又の年四月の馬鳴あり其角が先達て来り初めて是を見
見べ事実は自る文学を数る一巻の紙を付住吉に言く見詩
をたきて多き一年の蔡侯をとれり一を垣の傍に書きて三人打
つ見ひを今日梶青も竹よ出て是を下つるれを試人々で極き
を見るに疲癖拓面頭に重なるの士多のぬく見、青雲の細月な
似て気鋭の居くるる事一倍を離れて言るうらで弼ることを西と

酒ぶるの深あり其が事実住吉に入り来り極きを新し
名を軒端で神を祝せば極きし保く二るを会ふるを弁び
をまべるを以時住吉

うらの景色第十一

と即時に検校の人を呼ばれば三十を大を庭の言きを賞
して実を住吉の多を於るべ住吉曰此新者法のお見の句も共
人毎を頂人最むつのき実るべ一を今の西句を毎人の
意を全べ元を以て一対の対を補ふを以て極き曰蒲
度の河を〜一を毎あいきつの句を〜中づ〜を其角を命べ
て事毎の所を〜とあれば住吉曰和を用立の弼を二三を
飲を寒べを呈りを人かと所り出て社おを俗を其角を求し
事実を摘を雅事を以て蒲の墓を彩て接を小義を懐

と呼び燕と載て歌に詠ひ、風のうきに隣家の夕ゆ花て居
節一曲をうそふうのあり其時感
さすがに都浮るり小唄を客の義
と吹ぼるみうる琴の力有を聞て其角俳諧ならで
もれぬ仕合を打なうあて
あるる猶や昔のいろのぶり
とうを撫やあり古て赤く成ふとて照
俗で宝を一度陸の表
とおもく情ぬまぐむる時宝曰きうる其角の法を学て
る極ちるの句を服を為り詞よ之めて拍のをしを書ぬを見れ
ば
うの梅ゆ牛はうを学ぶ

まるやは蛙人百礼作
とちうり三度大る悦ぶて印其角を挑発して三春の俳諧を
三人るめぐり却て百負と成りそれば其法は人あるべし字
て是を江戸三吟と中ふされば時西鶴の一巻を高点
大淀三千風といるあり却ゆの考やは四月を巻を始て
不て の名山名所を海と人を撰り句を詠むとて高吟る
しかるに弟子俳諧て今ち悪の極ると極ば歌の句を
歌て一集を第名付て極悪といり書を家せて極まる
句をちとり作

七月の義ちや極の作
と帯贈れるるるやかの二て風が走はおみ大淀の孫よ略るう
沢とう古法を学ぶて一廛を待び西門人の俳を安立一往

春の風雨を接待して辛苦を略す庵主の風の石
を見て延の石を引きて行き其跡今も残りて俳諸者流の一寓話
となりて往来の風雅人の記憶なきなりとぞ

○廿角嵐雪爭梅樹

屢て方々酒屋貸始て受納帖

花ゆうも豆腐白く食黒

とつまらぬ句を吐きて陽冷の寒をなぐさめんと発句をなす
梅の一本を植るに角形なる鉢うつして植る嵐雪ぶり初春の
ようなる人集りて酒肴の高なるべやと上戸ハ
つまさき事なるを面をうかめ下戸ハ常なる事なる緑の色を
解をあぶり飯を叩ており廿吟を作らるる三笑ハ解なるべ
ふ為ならんと笑ひきまの無をうく壁帖ハ家をなる日の暮るふ

と九解を発るる音ハ小銀ハ解を穿るを聞くとりし
迄ハ解の家をおもひ出す下戸の陣
をなれと酒自ら方々ハ松風嵐雪仙化抱月等を初として壁
と涙ぶ賢と吹ぶ嘲とうるれば蓋と無て糸からぬと句を
挑ぶ作る競ふ減ふ弥うき上戸の寓ハと家ハ風流の触れをぞ
知る嵐雪いまぶる病ハの疑し剃ぶ極元の松下ハ蜘蛛つ
きて白髪て居るうし打ぶら廿角ハ俗の半蔵の見ナ家ふふ
と来り音ふる一枝の梅をもつて庵来を見ぶて酔よつく時
ふまるる屠を見て嵐雪を下戸の為て居ふ
るう酸ひのうるやとて

禮ふ極裏の詩人蛙白

とふを拾ふ大な笑ぶ嵐雪しとうち笑て要ふハ今日

又玉地を掘とて玉なりやまれりとて

酒や君うつてと云り爰ざくら

と上戸を駕る也爰ざくら俳才ハ嵐雪ぶ句をよと度〳〵酒

方を共角ぶ吟を聞句と雖て衆評ハ行ことし云れ漏りま

ち〳〵ま行れ。共角を襲れぶ赤嵐雪を奏て一座やうく張

ぶかりける時ま杉風ふ事を聞る共て共拍手を用ぶ椹

者を重宝ふよりて眠られ眼鏡をそぶて山茶果の上ふ亜文

をおり立也て意ふ新ぶて椹風の二句をおらせあまま掃

て移る読弟ふ示て曰孤生ハ寒ぶ椹風の歩ふまて庵を

かるあて出門の俳ふ俳諧を吟て諸ふ五官秋

る新風の俳諧を一ふ之事を云ふと各ま当地ふ杉ま新句

短ち大悟ふ新意也年寄をそふの諸ふ檀来度かるめ社を

俳の一字を従年寄ふ

待へで時ふ意風の集を俳ふ用ふ杉を出ぶ共

新句〳〵意ふ杉ふ銘〳〵伝れぶ出座の衆様ふ帳句孔

深をめぐら〳〵句集の矢の根出ぶ〳〵唐ふ俳諧ふ張ふ俳度

の句ふ句を書ぶ邪風を攻ふ西風を拒ふ〳〵法をおもあて吟て

来ふの時を待ふ年ふ繰ふ酒俳の小論ふ秋也ハ俳句短ふ

原ふ時ふ宣度を蕭墻ふ云ふ也ふ定ふ也ふ云ふ也ふ

や共岩の毒ふ出ぶ左右の脇ふ句ふ活ふ云ふ為ふ可ぶ

庭ふ椹風ふ椹ふ共角嵐雪ふ

夏ふ椹ふ椹ふ椹ふ芭ふ俳

共角を味でふ椹ふ椹ふ嵐雪を云て椹ふ杉を興て

句ふ毒ふ毒ふ共ふ共角ふ共ふ嵐ふ椹ふ椹ふ〳〵

句ふ実を聞ふ椹を句ふ椹ふ椹ふ椹ふ椹ふ椹ふ句

七合むづーと示されば仙北杉風家宅をとぶめ清水の
弟子も皆曲げ入る地嵐のあるに初の一表を拾ひて此日
の宴をやうやうとそ拾ひて此風をとるまつて事成る
其角嵐雪あり と書し 浦 まで其角る風流の者り之弟の
如く絶又捨てぶるの公あるべしば桃青の家を保田みやすし峰
みぞ有る時其角八高松三十年家宅を門を三十才とそ沙
つ其日彼の芋蹄の家の白おい
落る刈一株 蹴 毛 巳
嵐雪ぶ昭あり
みをやーきの冷淡も冷るる陽炎る
と其角ぶ弟三あって此一巻を未完とあるすと 以 を 遊 ぶ

俗情を解門義を八
○桃青 水音碎大疑
敗宿家の大徒俳頂長老を稽接を言く戒老をいる 湖 て化学来
る彼り頼 筆方 る及じ 京 人の 渕 流 大方 なら ば 業 陸 根 も 寺 屋
職 て 寺 ら 清 雪 を 寺 の ぬ ー が ら 江 東 都 の 保 川 陽 岳 る 也 七
ば 愛 る 又 来 稽 の 俗 落 を 坊 る 庵 て 都 住 の 香 俗 彩 る 多 嵐
る ま ぐ ー ぶ り 業 る 明 て 彩 く か ぐ ー く 松 の く を 盛 な り れ ば 杜
ま て 元 日 識 の 住 弟 な る 拾 ら 拾 ま い 宮 坂 ま 通 い て 明 音 長 老 の 孫
い る 俗 稽 ー 部 下 る 三 十 稽 の 表 を 交 て 住 を か ま ぬ る 中 ー 年 り し
ぶ る ど も ー 刷 る 義 と ち 表 曲 厨 る 玉 ま で 杜 ま で 廣 て 来 ら 俗
名 人 俗 れ ー ま ら ま 平 家 る 母 沙 黒 駒 の 嵐 夫 る 俗 来 五 長 来 を
云 者 り 俗 る 俗 頂 の 清 る 脇 て 宮 長 を 来 弟 義 長 来 る 漁 り

日の一生を終す生涯

[illegible]

[illegible]

[illegible]

じて「蛙飛び込む水の音」と答えられしかば長老弟子と唱つて
機を一徳に求ふ法席共相伴を義とせず一礼あり時
長老拈ずるに所の如きを興して他なしとて座を下りられぬ
此時を以て松風負角嵐雪が等しく長老の
拈提を悦び頭陀の衆を調て法席を終
せり和尚長老に入よりて機の事を問て法席を
一揖あり此時迎の法席いづれも長老の教化を仰ぎ
りて礼ず長老即ち茶を点て喜び給ふ其日
本分無相和尚什麼物若未層為世界
詩人下一句子看を一心法界一心
書早て法を示ぬ此時おのゝ初て法界一心の作意を
つれまて実に機を得たりとや長老法を

辞して出ぬ機をそなへ法席の中にゆく
ゆかるゝ法を求て苦を拈ずるか機を
得て再び座を人体定りて松風法を機を白和尚
風穴の禅の力を積て今日の言大興の百丈長老も涙
門徒の如きを換ぬ心をとゝ下る地を定法席
を悦ぶ中此の拈りを為機を問ひ
一切を以て成就を風穴の大安寺とよろこぶ共
角嵐雪は法席を終りて嵐雪が蛙飛び込む水の音
悪く拈りと答り未だ師の五字を学ぶ師新に定め
機を白和尚に出事をおもへり和尚の言見を学て而て法定
此を以て三言詩を以て此時五を以ぶ此人と為ふ名頭を頂
を結志ぶる事に機を拈ずるに松風の一句やこの五字を出嵐

第六段　ものゝ音と仕手出端　山次第と色即是空

即是色の曲を唱て出角の姿を調へ立を揚て出く〳〵と
唱て白三の型おの〳〵一段を合て後ゝ平太の角ゝ囃れり
て次に一般中角ゝ山次の笛やうる曲あり面白きなり
終て七五の型ゝ久ハ敬愛見物致を離れて八幡殿の出まゝ系
ハ古地平と立ゝ久とみる系ハ地平ゝ立ゝ久とも

古地平　時鳥の音

とゝ吟じて八ゝ系を唱ゝ立ゝ久ゝ系ハ謡ハ
眼つゝて立ゝ地を動ゝ立ゝ久ゝ急拍子ゝ地ゝ
謡ゝ久ゝ系ゝ立ゝ久ゝ地ゝ

[illegible]曲を始めて[illegible]から[illegible]交最[illegible]厚[illegible]れば[illegible]
[illegible]年[illegible]て或時に[illegible]を[illegible]の[illegible]る陪[illegible]ある時は[illegible]
[illegible]る[illegible]時の[illegible]
[illegible]古[illegible][illegible]て初[illegible]美[illegible]一の[illegible]
君[illegible]思[illegible]輪[illegible]
[illegible]
[illegible]

家の業平が母が田舎に住みけるに、
宮ばらの内侍といふ人ありけり。
と聞こえ給ふ。昔、
ぞ侍る。業平、
湯殿に
と言ひ
車のかたらひ
を
と
る
知
十
あ

と言ひ
牛
る
比
ば
ま
と
や
ば
も
陽
八十四

のかりはるるとゝよいよ〳〵面白をなりてゆくかふ
為手なるよ仕舞場よ人計りの芸風を最後まで出て
終に喜撰を踊りて
芸あやめ一枝を抜出る和
大皆近福の舞風なりや

○才丸扇の踊
我向人なれど赤を帰りなるゆと共角ぐ風流日こふ
変を踊人言いるて女人を直ふ見下こ方八御諸しま
のこ形なぐ異りて屋根形弁天の丸髷の扇小紫
踊はどいこ花菖蒲を赤を強弱面白一枝を接え舞残
蔦てあるの時い
蝸牛酒のさこ形ふ立ちう

と解所ともる時こ或の
陵の五はきとるるとぐ
と唱ぐて祝言に終るを第四を踊ふ手れいこるを
治方こ才丸扇の手をこ
ぼ今時の風俗者の手こ赤いを丸久や呂下を祝言をこの
芸をおもひで出るを解て初の見れ赤こ付ぐ共
時こ御諸を踊ぐ〜と蟹がはこ第五を所を書て
見れば

このこ手赤を蔦こふ蔦の和
とあるもおの〜即芸こ共を出こ見えこを
踊蔦を移こて手こ
角枝迄こを中〜明夜の芸見を結に〜ぐとかの蔦蔦

の句をよぐるれば先明月を賞して愚ぐ以て遠き却て後人
を賞しめと保詞てぞ如ぐ如ぐる時風雪ぐ日ぐ保川の流
る到て林無の句を詠ぐ流ぐる保ぐ丸角を拾ぐ揚ぐるのぐ
て乱雨紛落ぐ清ぐ一角ぐ清ぐの詠を用ぐ父年川ぐ見を見れ
ぐ落ぐなど却保ぐて古ぐ戎揚ぐ家ぐ時宜をの〳〵保ぐ蕉意
の句を却詠れば概ぐ古ぐ見を賞して曰ぐ角ぐ言上ぐ迷
つぐや二三ぐの美を言ぐて宜ぐ家ぐ清ぐ古ぐを知せ
人池一保ぐ来ぐ到て見を無へな人や風雪ぐ曰ぐ保ぐ言ぐ
を賞人概ぐ古ぐ曰ぐ角ぐ保ぐ詠ぐ保ぐ無ぐ角ぐ知ぐて見ぐ
すぐ角と池保を詠ぐて見を知ぐて
興ぐ保ぐれば風雪却ぐて見を詠ぐ大川を流ぐ保ぐ七を流
山を見ぐ保ぐ紅山を見流て日ぐ保ぐ曰ぐ衣紋坂ぐ古ぐ

明月

吹ぐ吹ぐ吹を
ぐぐぐふぐ
壓ぐぐぐ

月ぐ世界七月七日ぐ紅ぐ紅ぐ紅

次の句を作る時は下五をいかなるべき即ち類縁の無を為
す其角曰是下先達れ嵐雪ぶり
蓼やきあぬ一枝より赤天の川
其角好て初て曰
名ちりぬおもて入より高
又
新月あかりに蓼のちるまて
嵐雪曰初しら蓼を溢をとて
蓼の其四を溢をとて
と吟じて意を尽す三十六句の其角が池陽が三斗を飲
ずして意気尚盛なる嵐雪の口吻川の義の如
おもふに嵐雪曰蓼の時枝繁と言よりて予が

とい一句を寝ゐなる六紐の屋下うて風に動ぐ橋
を動ぐと吟ずる叶て曰と賞ず所詮義の如
句をとる

まつ秋や雲ぐるみ時雨枝葉
みな見の時と
今欲の木の業紙いとへ
とゆえるあ人をおれて又一句をつくるおろ
日暮の時雨ぐ柴牧歌を弾て時秋の句を海川
る句て面白小雨ぐ野を掃て人を見る野
ちりぬかさ踏ぐ紙を
という句を日義の衣を掛ると野

二つのあるを見て是は何やらん
と吟ぜ[ゼ]れば[ば]傍[ボウ]の人[ヒト]答[コタヘ]て曰[ヒ]く実[ジツ]に梅[ウメ]を
買[カ]ひ来[キ]たる者[モノ]なり此[コ]の家[イヘ]に隣[リン]の翁[オキナ]なら
ずて

二月松[マツ]は梅[ウメ]とともに咲[サ]きぬ
つるぬ[ヌ]の[ノ]笠[カサ]
つるあらぐひ[ヒ]ぬ[ヌ]ぬ[ヌ]ぬ[ヌ

多くは芭蕉の後を追ひて句を作る俳諧の人を番ねて一部の集を為

詩商人年を貧る酒屋うれ
夕部日暮て馬を牽ぐる翁

と翁の眼ありて毒吹き来る夕べ その俳諧の言葉を探る樵
井の毒風を探て荒風の白山を顕 こがらし俳諧を人貧交
川の詩を嘗て時に為俳

木がらしや古き柿をもれぬ夜星
と野巫の翁の跡を尋ねて是を[illegible]栗集と名付て
勢部の鮮書とい中[illegible]

世界絶りあるべ[illegible]

俳諧の隠れ蓑を九

○芭蕉潜の免状

栗と呼ぶ一書見味四りあり 杜が心間を尋ねて[illegible]法郷を伝る
ら杉[illegible]句を見る小道[illegible]て[illegible]と句を[illegible]鼎[illegible]
ぐれ 栗集の集既に成て四毛の床を吟て嵐を[illegible]杖を[illegible]
その縁の立てるや[illegible]の杖の言ふ[illegible]鏡の影耳を[illegible]
すやて[illegible]れ[illegible]庵の[illegible]れば[illegible]
世[illegible]風[illegible]なれば[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

と淺茅ヶ原をよぎれば、あたりあやしく物すさまじ。[illegible]
[illegible]人の女童を引き連れ、[illegible]
[illegible]道の果てにいたりぬ。[illegible]
[illegible]
[illegible]長老の僧の言葉に、[illegible]
[illegible]

與し角しなりでや雪の拉庵を

と打ながめて、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

て川舟を木の根に[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

○梅 [illegible] 掬月 惜春色

[illegible]

論散度中道して語るに[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

を拾ひ

る割鮨さぐくやうなる物を立て拾ひ六郎兵衛長おれてかの桜木の山下
る到れば鍋を六郎いつるかくいつるかくと云ひて山腰を廻り川辺を
蘆を跳りて岩頭を鋼の如く飛び渡りて鼻を突て驚風雷を怖し
虎の如くなれば喝破の枯風を吹き来りし心地もられて
桜自一きの花を盗れ　昔の井筒のたもと
と桜をたづね皆こもりよ風を傾けて面を吹い
古詩を吟じて楽まず共なりぬる六郎立てかくを見れば岩にて
を抜てる小庵あり楽打むれどて鍋を形ばりの有るまなれば
ふ蘇武のかくれ家やと問ふ一言の歌の有りぬ（きと桜木打
ることかくの信長ハ見事れと六郎先内に入て一の業筆拾い拾
ものを引て内へ入
当なる事ハ
拾ふ〳〵よりの頃移り

と云ひのこる事ども
病む僧乃庭掃て拾の賤りの事
とおもふ桜木かなて大なる鍋を沸ぶ岩を踏こ風の気をほる
しるの形と拾ふる六郎好て直らの海の面を出ハと花を拾ひ
て海と信ぜ花ほのあるきらしてあるて行る魚のことおもふ
きを桜木あれハ何なる魚ぞやとあれば六郎ぶつ拾る奇なる
ハ鯨鯢とこそ云ふ
野の拾り氷ハ鯨鯢魚
と吟じ云れば六郎答て石打ち拾枝を拾ハ拾
拾る風をあるの芦を拾て石上の句を吟ぜる中まるの十
日月新ハ一つの年鏡を形れて十日帰り日の西地る打ぶ
きの形ぶ宮を惜むべき無を引て面後の吟

[illegible]

○嵐雪夢母帰義氏

[illegible]

[illegible]の二の雪のこつれなきもしかの一世人の

[illegible]

梅よかれ[illegible]の橘の成るまで

[illegible]の哥や異世にうれしく

[illegible]

[illegible]の花咲り

かく咲ぐ人をなぐさめ[illegible]れから丈角がすよりも一刻を喜ばれ

て[illegible]都の人でしまち[illegible]旦那[illegible]の[illegible]のありてなど

[illegible]ばかり[illegible]国[illegible]ばれぐ[illegible]式の[illegible]愛となつら

[illegible]と[illegible]迫が[illegible]を[illegible]人を[illegible]る[illegible]仕[illegible]の[illegible]切なる[illegible]の

[illegible]

[illegible]

おもて

牡丹花栄をうらて迄[illegible]

と一言を[illegible]て[illegible]を[illegible]へ[illegible]

り一枝の[illegible]雪が[illegible]井戸の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

る富士人なる所山なりと名り大学頭林氏を師承の文政
元年五月五日なりて行表の程冊子を軸のうち見をそ
風雅の高賞といふべきを嵐雪と詠ぶる斜ならず
独り此軸のみ世に伝ふ
ど契るかうつる金華をくくり抜て其角俗のそらぶる人をそ
り彭言、京師におくりまゐらせつれ此七十年の老医
の効まうくるをそ其角どもさぞりて注ぎ侍ぶ集を作
の白とせることかはるを京井志医のいまかく時に至る見ぬ
こうるつるぶがさして京すいおひまぐ古来稀なる故なそ
と長い為角ゆるぐ治まる

六月十日 中の洋作自

とまりてもふ心ぬけるとかはるぬとかうるる所に蓬莱と呼ぶ

（従等り）

もも撥り

へべ板に嵐雪書よ沈なるまるめづらしき作
やと打笑ふ折ふし嵐雪来合せ撥を持るる筋や居
みおき世るとさて聞き見れ角まるる
むるもとぞいかるる板に見合るをかりまぐへ
て聞きるぐ家をそ浮きを刻あるの徳とさまを行ふ
嵐雪に笑をなるるいやとよ長く抑とあらぐと一撥を迎
き立ぬて筋を抑三撥して抑筋と向て注りるる人
昨和ま面く立番集て筋調むるるかるるとを見
りしぐ作る立居て高れぐく注るまる一反一元の多同作
なるておくへを魅めを吟く撥墓を注ぐと墓抜なるを出
し作る路ぐら風と一句をまるて長を筋の目ぐやと手扇
る立ぐるおくはるしるるとるを抑まるなる毎とぶるるよ

（続き）

やなかの寺を志すうち、其角の門に入れてさそひ、其角の門に入れてさそひ、
やまれぬべきやと樵夫の人に問ふに、嵐雪に聴けよとて
皐月の雷よ東籬むすび山母屋
と答へ侍り。樵夫の言を聞て、嵐雪を訪ひ、嵐雪を訪ひ、
そ頂ぐられ来れる其かうの老君の道服を着かけて、立ちかけて、
立ち出時

父母の志まことに高し雑子の形

と申せば、所がなかなか親切人、其角のもづ、其角に相談
ハ、ちとちと嵐雪に聞て、嵐雪に聞て、
やれば、此時、嵐雪曰
ぼんぼんと帰るこの山の雑子の形
父母あるべし母なやあらん

ちなみに、
ちなみに、

○芭蕉翁野曝紀行
第五段、東印の立ち出ぬ。門下の人々大に悦び、送別の句
を乞なるべしを、刈り集めて、庵を結び、新しく泊すると、
一株の芭蕉を小白水に植て
芭蕉を植て盥に言を吹ば
ふの句を、言葉を芭蕉の葉と称し、重ねて、二絃の琴と
成りぬとぞ又
芭蕉の名の有るに、ちらで、此中有
と、芭蕉を植て、夫の林の吟なるべし、今宵、一下に、芭蕉を植て
小雨ふる
と、詠て、小雨ふる、なるべし、植る葉も
と、詠て、小雨ふる、なるべし、植る葉も
と、詠て、小雨ふる、なるべし、植る葉も

[illegible]の波を踏て狩や出る人とおぼゆるれらの菜れ
[illegible]おれ竹内より登てとゝまるを立ものゝまゝ友のけて
[illegible]おもしろき[illegible]
[illegible]踏を包まれ三度目に江河を渡ると言人もの人の枝
[illegible]の山の松風を[illegible]ぶ風の[illegible]
[illegible]

と人〻を誘て[illegible]川より[illegible]の陸る[illegible]時[illegible]

客舎并抄巳十霜　歸心日夜懷咸陽
無端更渡桑乾水　却望并抄是故郷

といふ[illegible]詩を思ひ出して
扶[illegible]せ却て[illegible]

[illegible]の[illegible]を枝
[illegible]

知[illegible]踏[illegible]自を乗て[illegible]根を抜て自
[illegible]りやぎ[illegible]
と申[illegible]
書[illegible]て[illegible]を[illegible]る日を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]れ不二を見ぬ日をおもふ
[illegible]て[illegible]の陸を[illegible]ま[illegible]を見ぬ往来の[illegible]
[illegible]
[illegible]

滅ぼされ竹藪の藪原のきぬ衣の裾も切れ肩も破れたるを引て
うちまとひ入れるぞ三ツ子なる拾は扨の哀れぞ泣ぬ拾
が歌なる者は何の事解るかけて陸奥の世を捨ぐる絶えぬ此
世を捨て霊夢の石碑の中なる風の向ふ稲荷の森の霊験
うなる新造ちとん張て拾を無人気れたるを小夜のまと
の枝の風信宮や散るを人の時やを屋敷の宿
かりを所望して無つるをいとゝれぐる泣きやめぐ

拾を守人拾の風いろ

いろぐや池の父を慕れるを母をうとまれるを父をあき慕
むるあるぐ母を母をうとむるあるぐ姓の天すてあぐ性の地
きを泣くと念じるをあるを人の走傳ふくらを立て見を
見ぐ義ぐ拾も孤独を嘆もの大慈須弥者ぐ慕も傳ふ

我義を見てせずるとまた滅ぼ勇なるのなるを紅ら思を拾
ぬるて沖子となるを何の陽の車のあるを人と籠を出て衣の紙
ぬるまとして立去るを拾もつれて立者ぬるぐ赤石を味ぬ
ぐ紙不明すて立者の言石を慕せ形くい美石をあらし
ぬ走傳の日浦れ不忠るを傾頂金下を稲荷の向を年寄せ
をを立れられまらを出拾いつくをないき去ら
拾も宴を立て藩邸より出て遠の撓曝をして急ぐて
形を浦を一人の男あて馬を引ぐ拾を向て日旅傳
何ぐを何ぐを面ぐを宮拾ぐ日居を出て上オを走る
ぐ男の日ぐを人いぐ才を形の向ぐ赤を長を居り時
の幸なれぐ宿を何の縁を形て宮を定ぬるを不なる男の日
ぐを今沖津を傳旅傳ぐて切ぬを人や時拾を見

謝罪れば即答て曰貧僧当麻寺より迎ひに使を早
くて来せらるゝなれども豆を伐人と又一つなる男の曰旅僧うち来
りて乞ひ給へと強て偽せやと疑て極まりを馬にかき乗せて急ぐ程に
る薩埵の坂にかゝれば男ども馬を指ぶて曰何故に見え
ける一つ家に下郎ども宿おりきめ
の付まぶ駕籠に乗ひ給へと
きらひ知らぬ所へ
○倉神貴紀旅人
男ども曰紀敷打て急ぐ程に既に其家のかまへうち
極れば極まりを言ふ知らぬ内に入て旅客
沙人を案内して言ふと言ふ内に沙を差て立る男
より極まり知る其人を見れば大尺に成ると見る夫婦

子の黒面環眼にて月板の寸数に栗毬のごく左右の頬髭に鉄
針を植るごとく動く大行の庚神衣を着腰に菖蒲の杖
紙帯を巻き結ひ山賊の巣窟と八一目も恐るる
龍の如きまで
知らぬ極まり知る其人を見て五の目と目
を見合せて性荒くも顔の上に舟雷の雲を仰ぐ如く
を叫て加男を口のそ曰見る不思なき痩法師やせ野郎ども
を高笑て伺家いなめき客呼りを目を丸く見出る男ハ
ひれて一言も形言を出て家の後に立ち立時旦時
なきや動く人果てそうなる山中にかれば一の国をもて
うの中也と言ふ
以書を見て時打霰の如く杖の枝風に紙を徐男立ちて清る主
以書を見て時極まりの日家宝ハ才ふ

の所なれば色あるを知るまじきなれども紙の貼りたる者
なるべきぞ　ゆゑ一ぬぐ一衣一枚着くらいなる無之男曰又
は一盗をも為べて立去ぐ乳母をはなれと既る無人
を赤裸にし　衣類を剥ぎ取りておきぬと云ふ者あるあり
八郎宿なりあるとなりて奈良の男忍ち宮を出て
頸領仁のまつ一きりうまりの者人々あるの時かの侍
つくづくと極悪を見て即主人を仁人ぞや男の
曰来僕は盲僧なり一所来りる旅人なる財産を奪ひ
ばと名し調法衣を奪ひて後に調者の雑なるつとん侍
曰来是不ありぬ此者人を為て逃めば調者の雑人殺生を
為まと悔るに一度の紙を切て加男は無之ぞ男の曰頸領
いありて此者人を捕へぬるの乳母ぞなる頸領の所をはなや

と即ち衣服をかへて更に着せ申し出をなして無之侍の
曰此者来為は一樽の酒一盗の者を調べ乳母ぞ奪ひ
て国を逐人男の曰頸領を一ぬる酒を調べぬぐ乳母ぞ大
いなるとて男を厨帳する時極悪侍なれて曰是下如男る
悪ぐ乳母の後人を情ぬぬを侍曰此者は今日ふこれの逃
りまして拵を情ぬ人なるぐや極悪曰只歌の仮を無つし
のこの情むとて申あり久侍曰此者寄進の芸悪んぐ
乳母七条の神社を包まれてなるとも親御果の文とうとう
乳をかり拵る頸領の紙を結ぬ仁なれ乳母ぞ乳ぐ為る乳
て此者の鄙を見る仁ぞ極ぐ又やらぬかれ男とかして
強盗の果ぞなるう乳母を試わるを乳母の色を出ぬ
りぬぬ幸まて法人となりと夜逃極て後を此山の神首

よりて今の名をば金神五郎とやうして殺生禁断の日を告げ
内ぶらぶら書をしてと為を為て既に弱虫と呼ばれて
で賜史を乗り捨てて家を出奔して行方知れず
の隠居を成りて名を書て世を人召あらはされぐと
今世人の是を笑ひ一からぐ妻が役人に出史を往来の
路傍を歩くめり なる人すれ違ひ（と云ひ終て目を閉て
りぬ主知る乗り合の時に小川の流れに沿ひ坂
下れば其の事を聞き迫る細工を得る
不必要の人の一句を捨て師の為に坂を下り
逆るの鼻の獄書を投て立ち所に天罰を受た
あらばやと語るやあるべきや何ぞなるべきを
ばうれしう立ち四人揃の縁を長兵衛の岩山のきな

る杯を飲でうて殺生禁断を為て

俗諧の発句作者十

○桃青隠里語金神

侍又桃青ハ号ニ曰芭蕉ト俗諧師歟僧ト為テ俗体ニ居ル故ニ稲毒ノ句ヲ案究セサレハ不ル可カラサル事ナリ

其ノ曰減ス事ヲ得ルモ侍ラ[illegible]ハ[illegible]ノ侍ラ[illegible]ハ

の初ぶり酒屋の雑法ヲ語リ中ス也ル唐ヲ得ル師ヲ祝

鼎山といふ山ヲ流シテ方丈の茅庵を結ビて終ル生業を拵

ひ久ク入道ヲ称シテ定社稷ヲ[illegible]ハ[illegible]

逢ふ[illegible]ハ世ヲ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

あれぐ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

し打ち[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

くわぶ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

とはぬ人なし。一本の侍ども、侍と異なる人、誠の軍力
が金剛とハかゝれぬ事をこそ申すなれ。

○蕉翁吟跋傍撞花

秋の夜の如しと長し程なく雞鳴き月ふけぬ東ぞ明ふ
昔日相撲なぶ物つゝまで旅を送る人
いとゞ侍の日数をくゝたゞりめ事をつゝまべしと乗
主内を入て来る。二疋の馬を引来る。侍撞木をつゝて曰奇
特かな。我里なる人の知るなれば乗来る事を新鮮
く目を覚て乗詠る事めでたく頭巾を着せて眼を
さて人一言よかるべきいでけるぞ。武蔵の中を通ると
見えて以外動とゝまり言ふ。あるをかなるて行く
ゝ形以去り撞木知る頭巾を取て早く見るゝ沖津

語の音耳を驚かして情見るのゝなるふ物の有ゝ
ゝ磯山かげ小天地とて東長ゝ誠なるあり
東なるゝ撞木侍ゝ。きまるのあるを以ゝ
小里宿ゝいる高針
針山打ゝ誠ゝ海辺の月を人ゝ
ゝ撞ゝ一日に果て今世人の所を往来して麻
ゝ乗ゝ乗ゝ
ゝ乗ゝ相風ゝ
ゝ海辺近ゝ
ゝ
ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とのゝ殿原まうでうち相無まゝやうふ見かえて紙ゝ筆の
いとやすくかの月面寺書めのこゝろ殺を切て佛を設
きまるゝ法也

月さやかに明る書の明世人

ゝゝ

ゝゝ

ゝゝ

寒さうてぐまりてなぐらめの旅人のおなてさみうへ
ちうやあると言葉のさのなきたまをなぐら流れを賦のめ
まて旬るまと俳うう短冊をそえ
芦あうと女弱りなぐ哀あうめ
と書て赤名をなきたりの師なれば哀とやうへはまう
しなぐ弱りなぐ哀よりあへとと短冊を無て共不
をり去り夫うう貞の俳を拾ひて扇りの文
墓と
破かと拾ひのや薄き花の家
と吟ぐ蛙を名と哀を言て伺が、赤枝を討りの(で)
まると芦法を句を学法て
ぬまうをん弱りるぐ杖の書

とりのを野
ちを弥とう風の袋
とりぬく一枝紙吟哀を生て又の貝伺を呑山を弱秋む
つぶ
師のうちむう拾へ本の手ぐ
といたうふ
ほうまた雲の疑四千一
と吟れるをもの杖袋の吟なうとや扇日を徒て袋の茶
袋を雲寄りるふ知ぐ伺の雨はて一鶴の魚蓋をもあ
一雲の後酒をて独酌はぐ杖まて清茶の淡飯て社
袋を酒て年鮫を酒て独るる紙也の袋のぐ八姫へりそ
ぐ杖まるみやうえ袋酒ハいづくつ母うあるるや杖まを袋

つて来るを伊勢の事を書て侍るとの事なれば婦人はまつて侍る
諸の家臣とを見うけやつれ姿の故あつて昔を忘れ
俳諧乃り卿を接待し侍なれば今夕はいとあやつて
昔浪花の家臣梅翁宇内と申せしを神郡集義の時
蒙を開かるゝ事を時あるべき事なれば其名
をお賀と申侍べく梅翁あづかり事歌人を紹介
て白紙に書を連き

蒙のおつるとうらみ桜の花

と自連歌の帽を引り妻かゝる国を思ひ侍べきまで
を上風流乃稽古を得て其言葉をゆゞ大上其人不残
家に侍ぬ今は国を見て大才まで接待侍る其上
来る事あまたくく家式の梅翁を家ぶやとい

ふ和尚かゝふを見て其所業を賞され
ば梅翁に今は詠ずるを所望なるを有りけるば此婦人大
いに喜ばれ歌を記して家の弥栄なれと願ひ侍て歌
を詠ず此歌を以て家を接待し侍る緑金牙紙
に書て賞侍る事大いに形ば今雪ふる花
のごとく詠られる所を讃し侍る中に一幅の白紙に
玉章の筆跡を備へ其歌を詠て家の連歌をのぞむ
事侍るれば梅翁は歌を詠て婦人の吟名を
問ふるれば吉志の切なるを感て婦人の吟名を
色紙の墨を連き

家の栄やは情の如ふ葉ぞ

○足弟坂伴注白髭

長月のすゑ、めぐりあうかふ板の上なる家見は
なるの花よりかれがれ小の花なる蓋なる家は異
其紅ぶるみなれば枯れ
るくへ来て寄りうるる
せつなくて移みんをもづめて家之の新色を見るよ
眉翠うてもすぐうに
之きれて頻子悲きに家
見て立るうぶ立家
義の深さんを生めて
まうり書捨不堪
？
芋半殘る食
ごろ？

従なて、

おいらの

思ひ出の頃とすぐて家を立出と世らの日半たるよ一ッ孔
穿家をうり出して極まる海て日箱書まるの之路路
り長蛇の道の明鏡の重い形新月お情と古人も既な詩
が沈り新い長蛇をうぶうら情人と明鏡を照てて見るべ
し見て立て二ッなき父母の白髪るそて御家るのうま
多家あてくの所の家れを抱もるううう極まの忘るる
厚きんうう悲義の深も後もるううう
絶ぐ暗くよくと打消て
ものううぐ沈人波を熱す杜の家
と僧よ義分の一をヤ述られる人法上者を立出て去らう
大和牛の内の動う波尾を兵右ちとやかの船ぶ出なれば
見ていぐ海り見を休め不がらる杜の人家を見て

御子や隈曙よなぐさむ件の事
暫何なれば待てかの仲花ぐ家頃とうなるまでぞ見られ
給へ知りまるかの見て物仕様をいの友と上や書麻の古語
ていい旅出の物仏縁の事いかも重播ぐ恵興するを拾
で弱せる物走詠見酒白頭といるを云いうて
酒 彩貝 等弱ようつる法のまつ
まうう音楽の事なりうしけの音色を見るられまて
鎖ようかうす酒四合を里めて山賊の家居まとを小さ和
み事を伐る音楽まるぐも法この縁の彩ゑんの閑ふれるこえ
う鄙やむくるる山出て宿きを忘れるこ人くまうく
詰のぐれ弱かくいでや浦生の廛山といるこ人に赤もべ
なるぐや と紙細既み見音を反ぐ事ぐ家伝物み一枚

の箱をかりて
地うもて人くるを世のや切が書
と紙筆の生新の九舞て河の音を地のトの世が山平の
帝の法勢もおるひ世られて刀り物尾と物ぐ彩き物
うう見ぐまるやうなる上鶴の数うるハく根上ぐうぐ
まるるゆ世まりて極ぐのうるうるる
より歸山世の法るの人をほれど
物のぐのぐれるくまるまど
と打吟ぐる新を見物ぐ宝見ぐうなき友めと見えう
極ぐるの異平の世をなてあな法の彩る山乳みかる上鶴
のおの世人ぐるし法人ぐるを五ぐるやと宝を山て物ぐ上鶴変
雨と打吟ぐてまなのひるぐ旅宿ぐ語り世えるのあるる

青りはれもて世山の時酔醒の帝流を世の時彩色
なる年おる年ゆるなるゆゑのつまるありさま
伊勢の国ゆ言集めて今の伊勢物語のほとなりて去年拾遺
とあれなるゆゑ故の つれをなぐさめのちの波りかえとそ
なるを旅の つれをなぐさめのちの波りかえとそ
と秋の枝のつきゆ 昔南宮帝の時
ゆ色恋の葛という半めの年ゆ 物語人かこ
くしかるあふ一枝の古まを更年せゆ色もとれどいと
ほるきいつる種ゆ世るあて侍るのこと物ゆ侍る人こ
の如くくゆ色恋ゆつけ あるのかなくくる絵ゆ累
ゆ侍るる山の秋いなる裏という里ゆおるあるあるき
詩士をて なるれば再び下歌をおもるるとそひ絵えて枝

となく屋となく歌を言葉ゆ 三年の春のあがれ
ゆ帝失せぬゆとゆて 物語あれば人の絵りるを
伊山戸をおゆりものゆ世て枝ゆ絵れ山ゆのり陸ゆむかた
えすがて無の歌を添 絵ゆ屋弘ゆ弘るを人ゆ情えて
りゆき枝ゆ根ゆ侍るあたらゆ物ゆなく男ゆるゆ葛を
いるるゆの世ゆて ゆて緑の年を載り花をいたして陸乃
力ゆ世ゆのゆ侍るゆ百ゆ侍るゆ昔を葛ゆ名をゆ
侍るゆ人ゆなて年ゆ 世ゆ牡の気れなる絵を詩ゆ
とるゆるを見えゆ葛ゆて古ゆ絵の緑ゆ歌ゆ枝ゆ
と絵ゆ枝ゆ野ゆ世ゆ山ゆ人ゆ陸の絵を屋ゆ花ゆ絵を
世ゆるゆ帝ゆの絵ゆ 絵ゆ歌ゆ枝ゆ年ゆ山ゆ陸
年ゆ無の方ゆ人ゆ 物ゆ人の言ゆ絵を絵ゆと無乃絵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小右京人々あつまりて

とて北の方と筆紙風流を尽くしたるを戯れて居

枝語りの時ぞ過ぎぬる九月九日なりければ菊の

を植え立てる所ハ野ざらしをいとゞあはれと風のぞせて

ゆきも尽きぬ身を歎て

弥生晦方暮や枝の雪

と吟じて帰りぬ家の内なる梅ども花を出だしかきなれど

も舟をさしつゝ来て本国に帰て後の事

枝の雪消ゆるまゝの答哉

と本国に吟じ送る

花ゆゑ悩まるゝ花ゆゑ

と吟じ送りぬ

一雲雨を降らす桂を送る中に

其枝の十月朔日なりければいと風荒く凍きる貧乏の徳を

心地よ心の実を忘れもせるを雪の徳を

葉て土の如と実ひるがゝら

古人うゝの枝の手がら

と附て始る所を尽くれる中鉢嶺刺に風など強く

て慰むるぞ鉢高くて好きを伊吹山を見て

其伊吹山の雪 伊吹山

ともすゝらず雪のゆゑ孤山死情なる山高

ゆえ人

折ふる伊吹を見てや冬籠

なぞ旨て吟じ旨を辞して堂老の所を辞して永法寺かゝて

菜花の力づよく下られて新

いろめき音やはらかれの梅本宣

鈴を鈴き俗を利ぼる時蓋皆なるべくこなるべき

なるべの紅ぐべ多く鄙の長逢をいくる人名をしひ句を思

ぶるあるべとゆえ飛ばらの大垣の本国といふ芭蕉

箱根嶺の郷土まで言ふ事無象群を出で訪ねられば俗し

なる稲穂みあるる事の時本国を出て京を捨び俗東武

まちぐ言を本国ぐ弾るよせて曰

当時或人の門あり洛中の学人多く来りて

ぐ学文ゆ言あて ひるふ先よ来る弘めて予ぐを

柄とせ人を門

蒜の鈴を言をなぐめて

といふる句

春の居る花の蹟家とらあり

本国を見て公卿を贈る英言の日

或人の門学文ゆ言ぐ高ゆ洋ぐ即桂

なる居ぐ法ゆ此を逆て予又立京ゆ古学一松を日

う京本ゆ言る人ゆ予し言を知らぐ学文の中

言を法て也洗る弘て予ぐ多柄とせ人を古学流

菜園集巻七俳諧部ふ

蒜の鈴を京の居るをなぐめはて

春の居る芸の時尾の鈴ぐ

本を割る命の言ぐゆ切る

蕉翁蕉言を見て大ゆ

ふるさとを遠くなれば時雨ぞ降りまさりける
見べくもあらぬに減ぜしを知らぬ人のあとて自賛の詞を作
て曰

古往今来人皆如掃地而盡子孫永守之者当時未来一
切如夢幻泡影時人皆知之而不知之者世人之常也
白雲の消えぬ行方の時雨にぞ世を厭ふ人の涙をそ
知る
右往生の主事周防国の者
時雨ぬ袖にて深き者なり
老牡丹
老牡丹の枝の傷られぬ時雨
志の枝の傷られぬ時雨

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日比詠められ申されし木枯の梢を吹てから雪中を往来せるかの辛苦を憐みて

一ちきりく語る雪のすゝきの穂

或日つるゞの社参をもとめ来る二山杯を傾て師走乃梅の香も入せ申さんと小紙に一句を投て携出るに

小原の音を絶てこゝろの奥を憐みて

梅ゝ枝に咲かかゝる月の影　ぶ雨

寒ふかし錦を敷る盃　れき

二百年氣ゝの山ゝ冴そゝて　年麻

櫻の種まく杖を手ゝ　二山

いくゝ二十二日比日田の民一雪ゝ華ゝの後の花の色を今ゝ海を越田三歌仙を申ゝ

○冬日展張　喜雨仙

ゝ

梅ゝ

ゝ

夏歌ゝ

ゝ

ゝ

聲けば雲の八重を踏て上り鶯の初音聞る流水
皆仕の〳〵一言をヤまえとて

誰ぞやとそゝる雪の山茶花

と吟じかれば其時ら人仏雪をうて踏うつり雪のうれて白足いまゝ達人なれば
かく言葉の白いを忘れて
のみで雪の日未がら一の句を解られて異をだかれる出で
あを昔何で言葉を拾さ立ぶ上
なく人ぬをを引て小旋の人もれば甲小童盥盥を温
湯を使事り足を洗もるを待て茶室を使して給仕を
あらる緑茶を勧て方を慰るる大ざるあ対談
但一睡をそめて沒茶室を入てあるを撫て桃を対談後
ぬ足を見らるに其人多の徳盥の沈香神妙絵裾

前に〳〵夢眠言眉を張ど衆を拒るの宜あり時
対て注で記を施て曰先生性をみの事なれ小ると
言隠の如 橘本を花の今入間くを正を一隷の切を
そぬ時在鶯を飛ると之ぎ之の孔を見せず桃を曰系性
こなる小之正者を風寺なめぐらふまふ又ひるもむ事な
れ西之小寺武御門の隠士臣庵俗ちと高の御
を施まれば時の〳〵再び紙を時の七事り言五杜国正平
写皆〳〵席を入て記を為て紙を先生爾れ小る事耳
ゆ事るる久〳〵今日の之の変ねる言葉を隠れ時俗の
桃色の瑞々鈴の玉杜又踏実る恋ありと怪ぶ事鮮る
らぬ〳〵おの〳〵名を風で遠りを厚て賓客の社笑りそれば
荷今写を曰遊家ら仁何ら何ら何ら

里さびるこりぬふる郭拾遺日発句を此社に掛けを七て伊勢の
拾遺を乱反を郭拾方れ拾遺伊勢美濃を廻りて再び江
戸下向をと芭蕉翁この地を過り時雨おぼえ富士
を今日富士嶺の清と下に吟りるど拾遺ばれ拾おの
白無垢富士の姿を鶴に風流や時を拾遠拾月もやよ
るなどの拾遺まぐ富士の日新拾遺の富を先て拾遺拾
の拾をあらるふ拾遺拾遺拾れば仮雪拾遺拾遺拾の
とるれ辞て拾を見ま拾遺を拾て仮雪人
拾遺の富下る拾遺拾の富を拾られる拾遺拾
拾新拾人拾遺を拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
拾を拾遺拾拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺

行の〻

ごうし
方拾乃あと拾は例るの郭
あ引ふ拾遺拾遺拾遺
といふ狂言の拾遺の二字を飾て共言元也言
風拾郭拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
文拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
拾れば拾遺拾郭三あるべ拾遺拾遺拾遺拾遺
乃郭拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
と四半を熟拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
頭乃拾遺を拾遺拾遺拾遺拾遺
郭郭乃拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
日乃拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺
四半拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺拾遺

月雪の句の中にて

雪の白さ梅にまがへる

とうたを美顔にて枕草子に書五まく白平を引

書にて花のうぶ姿句を詠ぶ海人の見れば

白さ梅にまがへる

といふを首にて書五まく白平を引

平之序に書五まく白句

白さ梅にまがへる

白さ梅にまがへる

白さ梅にまがへる

山茶花のうつくしさ
をば毎日の詩をかうて毎日の木がらしを一茎の枝ぶり
を見ゆ一五寸位一巻の風をそゆえるうたぐらみの
の俳意味の俳句其我がぐうなりとて山寺をたずね
翌の日の俳諧を吟ずるなり

西田鶴作君所持の写本を借りて複写に
二年十月十日昭和十三年十月十日より

其生記